Microsoft Windows Server System

System Center Data Protection Manager 2007 の導入

Microsoft Corporation

公開：2007 年 9 月

概要

「DPM 2007 の導入」では、DPM 2007 のインストールと設定を行うための詳しい手順が説明されています。また、DPM ユーザーインタフェースの概要も含まれています。「DPM 2007 の導入」には、DPM のインストールのトラブルシューティングに関する情報、および DPM 2007 の修復とアンインストールの方法も説明されています。

本書に紹介されている情報は、説明されている問題について、公開日現在における Microsoft Corporation の最新の見解を示すものです。Microsoft は変化する市況に対応しなければならないため、本書の内容を Microsoft が確約しているものと解釈しないでください。また、Microsoft は公開日後に提示されたいかなる情報についても、その正確性を保証いたしません。

このホワイトペーパーは情報提供のみを目的とするものです。Microsoft は、明示的であれ黙示的であれ、法令によるものであれ、本書の情報についていかなる保証も致しません。

ユーザーには、著作権に関する準拠法のすべてに従う責任があります。著作権法に基づく権利を制限することなく、本書のいかなる部分も Microsoft Corporation の書面による明確な許可なしに、電子的、機械的、複写、録音、その他のいかなる形式または手段によっても、またはいかなる目的のためにも、複製すること、情報検索システムに保存すること、送信することが禁じられています。

マイクロソフトは、本書に記載されている内容に関し、特許、特許出願、商標、著作権、またはその他の知的財産権を有する場合があります。マイクロソフトの書面によるライセンス契約に明示的に定められた場合を除き、 本書の供給によって、上記の特許、商標、著作権、またはその他の知的財産権を使用するいかなるライセンスも与えられることにはなりません。

目次

DPM 2007 の導入 7
本項の内容 7
DPM 2007 のインストール 7
本項の内容 7
DPM 2007 のシステム要件 8
本項の内容 8
セキュリティ要件 8
関連項目 8
ネットワーク要件 9
関連項目 9
ハードウェア要件 10
関連項目 12
ソフトウェアの前提条件 13
本項の内容 13
DPM サーバーのオペレーティングシステムの前提条件 13
関連項目 14
Windows Server 2003 のインストール方法 14
手順 15
関連項目 15
DPM サーバーのソフトウェアの前提条件 16
関連項目 18
保護されるコンピュータのソフトウェアの前提条件 18
Eseutil.exe と Ese.dll 21
関連項目 23
DPM 2007 のインストール 23
前提条件ソフトウェアの手動によるインス トール 29
関連項目 29
前提条件ソフトウェアのインストール 29
関連項目 30
必要な Windows コンポーネントの手動によるインストール 30
Windows Server 2003 の必要なコンポーネントのインストール 30
Windows Server 2008（プレリリースバージョン）の必要なコンポーネントのインストール 31
関連項目 32
SQL Server 2005 の手動によるインストール 33
関連項目 35

SQL Server 2005 SP2 の手動によるインス トール 35
関連項目 36
DPM 2007 の修復 36
DPM 2007 のアンインストール 38
DPM 2007 のアンインストール 38
手順 1：DPM アプリケーションのアンインストール 39
手順 2：DPM 前提条件ソフトウェアのアンインストール 39
手順 3：保護エージェントのアンインストール 40
手順 4：ユーザー設定のアンインストール 40
手順 5：ワトソン博士のアンインストール 41
DPM 2007 の構成 41
本項の内容 41
DPM の構成の概要 41
関連項目 42
必須の構成タスク 42
本項の内容 42
記憶域プールへのディスクの追加 43
関連項目 44
テープライブラリの構成 44
関連項目 45
保護エージェントのインストールと構成 45
本項の内容 46
DPM サーバー上でのWindows ファイアウォールの構成 46
保護エージェントのインストール 47
ファイアウォールの内側への保護エージェントのインストール 50
サーバーイメージを使用した保護エージェントのインストール 51
保護エージェントの手動によるインストール 52
WSS Writer サービスの開始と構成 53
保護グループの作成 53
本項の内容 55
新しい保護グループの作成ウィザードの起動 55
保護グループのメンバーの選択 56
Exchange 保護オプションの指定 58
保護グループの名前と保護方法の選択 58
短期保護目標の設定 59
テープベースの短期回復目標の設定 61

保護グループへのスペースの割り当て 62
長期保護目標の設定 63
長期バックアップスケジュールの変更 64
ライブラリとテープの詳細の選択 65
レプリカの作成方法の選択 66
パフォーマンスの最適化 67
保護グループの作成 67
オプションの構成タスク 68
本項の内容 68
エンドユーザー回復の有効化 68
手順 69
関連項目 70
シャドウコピークライアントソフトウェアのインストール 70
関連項目 71
アラート通知のサブスクライブ 71
SMTP サーバーの構成 71
手順 72
関連項目 72
DPM アラートの発行 73
DPM 管理シェルのインストール 73
手順 74
DPM システム回復ツールのインストール 74
DPM 2007 のインストールに関するトラブルシューティング 75
本項の内容 75
DPM 2007 のインストールに関する問題のトラブルシューティング 75
リモート SQL サーバーの問題 78
エラー ID 4307 のトラブルシューティング 79
保護エージェントのインストールに関する問題のトラブルシューティング 80
DPM 2007 における DPM 管理者コンソール 88
本項の内容 88
DPM 管理者コンソールの使い方 88
タスク領域と表示ウィンドウ 88
ナビゲーションバー 89
メニューバー 90
情報アイコン 90
関連項目 90

DPM タスク領域の使い方 91
関連項目 92
DPM 管理者コンソールを使用して DPM 2007 を管理する方法 92
手順 93
関連項目 93
導入のベストプラクティス 94
DPM 2007 のシステム要件 94
ネットワーク要件 94
ハードウェア要件 94
ソフトウェア要件 94
DPM 2007 のインストール 95
SQL サーバーのリモートインスタンスの使用 95
DPM サーバーのソフトウェア要件 96
SQL サーバーのリモートインスタンスの使い方 96
保護されるコンピュータの要件 97
DPM 2007 の修復 98
DPM 2007 のアンインストール 99
DPM 2007 の構成 99
テープライブラリの構成 100
保護エージェントのインストールと構成 100
DPM サーバー上でのWindows ファイアウォールの構成 100
保護エージェントのインストール 100
クラスタデータ 101
WSS Writer サービスの開始と構成 101
保護グループの作成 101
長期保護 102
レプリカの作成 102
アラート通知のサブスクライブ 102
他のバックアップアプリケーションとの共存 102

DPM 2007 の導入

本書では、Data Protection Manager 2007 の導入方法について説明します。

本項の内容

DPM 2007 のインストール
DPM 2007 の修復
DPM 2007 のアンインストール
DPM 2007 の構成
DPM システム回復ツールのインストール
DPM 2007 のインストールに関するトラブルシューティング
DPM 2007 における DPM 管理者コンソール
導入のベストプラクティス

DPM 2007 のインストール

System Center Data Protection Manager (DPM) 2007 のインストールは、DPM の前提条件ソフトウェアのインストールと DPM アプリケーションのインストールという 2 つの主たるタスクから成ります。DPM のセットアップウィザードの指示に従って DPM のインストールの設定を行えば、内蔵 DPM のインストール処理の一部として、前提条件ソフトウェアのインストールが自動的に行われるか、または同ソフトウェアのインストールを行うリンクが提供されます。

本項の内容は次のとおりです。

- DPM サーバーのシステム要件。
- DPM のインストール前に、オペレーティングシステムのインストール時に既定以外の設定を指定する手順。
- DPM をインストールする詳細な手順。

DPM のインストールに前提条件の（1 つまたは複数の）製品の製品版のコピーを使用する場合、または、DPM の前提条件ソフトウェア製品（1 つまたは複数）の自動インストールが失敗した場合には、本項の情報を利用して前提条件ソフトウェアを手動でインストールできます。

本項の内容

- DPM 2007 のシステム要件
- DPM 2007 のインストール
- 前提条件ソフトウェアの手動によるインストール

DPM 2007 のシステム要件

System Center Data Protection Manager (DPM) 2007 をインストールする前に、保護される DPM サーバーとコンピュータ、およびアプリケーションがネットワークとセキュリティの要件を満たしていることを確認する必要があります。また、サポートされているオペレーティングシステム上で実行されていること、およびハードウェアとソフトウェアの前提条件を満たしていることも確認してください。

DPM は、ドメインコントローラとアプリケーションサーバーのどちらとしても使用できない、唯一の目的に使用する専用のサーバー上で実行するように設計されています。DPM サーバーは、Microsoft Operations Manager (MOM) 2005 または Microsoft System Center Operations Manager 2007 用の管理サーバーとして使用しないでください。ただし、保護される DPM サーバーとコンピュータを MOM または Operations Manager 内で監視することはできます。

本項の内容

セキュリティ要件

ネットワーク要件

ハードウェア要件

ソフトウェアの前提条件

セキュリティ要件

System Center Data Protection Manager (DPM) 2007 のセキュリティ要件は次のとおりです。

- DPM 2007 をインストールする前に、ローカル Administrators グループのメンバーであるドメインユーザーとして、そのコンピュータにログオンする必要があります。
- DPM のインストール後は、DPM 管理者コンソールを使用するには、管理者アクセスを持つドメインユーザーである必要があります。

関連項目

ハードウェア要件

ネットワーク要件

ソフトウェアの前提条件

ネットワーク要件

System Center Data Protection Manager (DPM) 2007 のネットワーク要件は次のとおりです。

- DPM サーバーは Windows Server 2003 Active Directory ドメイン内に導入されている必要があります。ドメインコントローラには、Windows Server 2000、Windows Server 2003、Windows Server 2003 R2 Server、または Windows Server 2008 オペレーティングシステム（プレリリースバージョン）のいずれかが実行されている必要があります。

  Windows Server 2000 のドメインコントローラで実行されている DPM 2007 は、以下をサポートしません。

  - ドメインの境界を越えたコンピュータの保護。
  - Windows Server 2000 がプライマリドメインコントローラであるドメイン内にある Windows Server 2000 の子ドメインコントローラの保護。
  - Exchange Server 2007 を実行しているコンピュータの保護。

  Windows Server 2003 のドメインコントローラ上で実行されている DPM 2007 は、フォレスト内でドメインを越えてコンピュータを保護することができます。ただし、ドメイン間に双方向の信頼を確立する必要があります。ドメイン間に双方向の信頼が確立されていない場合は、各ドメインに個別の DPM サーバーが必要です。DPM 2007 はフォレストを越えた保護をサポートしていません。

  Windows Server 2003 アーキテクチャの不可欠な要素である Active Directory ドメインサービスは、分散コンピューティング環境用に設計されたディレクトリサービスを提供します。Active Directory ドメインサービスを使用することで、企業はネットワークリソースとユーザーに関する情報を集中的に管理し、共有する一方で、ネットワークセキュリティの中心的な権限を持つことができます。Active Directory ドメインサービスは、Windows 環境に総合的なディレクトリサービスを提供するのに加えて、企業が必要とするディレクトリの数を分離・移行・集中管理・削減するための統合ポイントとなるように設計されています。

- DPM サーバーは、保護されるサーバーおよびデスクトップコンピュータとの持続的な接続を必要とします。

メモ

広域ネットワーク（WAN）経由でデータを保護する場合は、ネットワーク帯域幅の最小要件として、512 kbps の速度が必要です。

関連項目

ハードウェア要件

セキュリティ要件

ソフトウェアの前提条件

ハードウェア要件

System Center Data Protection Manager (DPM) 2007 では、記憶域プール専用のディスク 1 台と以下を専用とするディスク 1 台が必要です。

- システムファイル
- DPM インストールファイル
- DPM 前提条件ソフトウェア
- DPM データベースファイル

メモ

DPM は、オペレーティングシステムがインストールされているのと同じボリュームにインストールできます。または、オペレーティングシステムがインストールされていない別のボリュームにインストールすることも可能です。ただし、記憶域プール専用のディスクにインストールすることはできません。記憶域プールとは、保護されるデータのレプリカや復旧ポイントをDPM サーバーが保存するのに使用するディスクセットのことです。

DPM は記憶域プール内のディスクを所有し、管理します。記憶域プールは動的でなければなりません。DPM では、ディスクは、ディスクの管理内でディスクとして表示される何らかのディスクデバイスとして定義されます。記憶域プールでサポートされるディスクの種類の詳細、およびディスク構成の計画方法については、「Planning the Storage Pool」（記憶域プールの計画）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=91965）を参照してください。

ユーザー自身の追加ディスク容量を管理する場合、DPM では、保護グループ内で保護するデータソースに対して、カスタムボリュームを取り付けるか、または関連付けることができます。カスタムボリュームは、基本ディスクまたはダイナミックディスクのどちらに置くことも可能です。DPM サーバーに接続されているどのボリュームでもカスタムボリュームとして選択できますが、DPM はカスタムボリューム内の領域を管理することができません。このバージョンの DPM 2007 では、ディスク領域全体を使用可能にするために、記憶域プールに接続されているディスク上の既存のボリュームをどれも削除することができません。

メモ

保存したい重要なデータがある場合は、DPM によって管理される記憶域プールではなく、記憶域ネットワーク上の高パフォーマンス論理ユニット番号（LUN）を使用できます。

DPM サーバーの最小および推奨ハードウェア要件を次の表に示します。DPM サーバー構成の計画については、「Planning for DPM Deployment」（DPM の導入計画）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=91848）を参照してください。

メモ

DPM は 64 ビットコンピュータにインストールすることをお勧めします。

コンポーネント	最小要件	推奨要件
プロセッサ	• 1 GHz 以上。	• 2.33 GHz クアッド
メモリ	• 2 GB RAM DPM によるメモリの管理方法については、「DPM and Memory」（DPM とメモリ）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=97938）を参照してください。	• 4 GB RAM
ページファイル	• DPM 記憶域プール全体の 0.15 パーセント。 DPM ページファイルサイズの設定については、『DPM Operations Guide』（DPM の操作ガイド）で「Managing Performance」（パフォーマンスの管理）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=91859）を参照してください。	
DPM のインストール用のディスク領域	• プログラムファイルのドライブ：410 MB。 • データベースファイルドライブ：900 MB。 • システムドライブ：2650 MB。 **メモ** SQL サーバーのインスタンスを DPM ダウンロードパッケージからインストールする場合は、システムドライブのディスク領域要件として、これだけの容量が必要です。SQL サーバーの既存のインスタンスを使用する場合、このディスク領域要件はかなり軽減されます。	• プログラムファイルボリューム上に 2 ～ 3 GB の空き領域 **メモ** DPM は、変更ジャーナル用に、保護される各ボリューム上に少なくとも 300 MB の空き領域を必要とします。また DPM は、テープにデータのアーカイブを取る前に、DPM の一時インストール場所にファイルカタログをコピーします。したがって、DPM がインストールされるボリュームには 2 ～ 3 GB の空き領域を用意しておくことをお勧めします。

コンポーネント	最小要件	推奨要件
記憶域プール用のディスク領域 **メモ** 記憶域プールはユニバーサルシリアルバス（USB）/1394 ディスクに対応していません。	• 保護されるデータの 1.5 倍のサイズ。 ディスクの必要容量の計算とディスク構成の計画については、『Planning a DPM 2007 Deployment』（DPM 2007 の導入計画）で、「Planning the Storage Pool」（記憶域プールの計画）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=91965）を参照してください。	• 保護されるデータの 2 ～ 3 倍のサイズ。
論理ユニット番号（LUN）	-	• GUID パーティションテーブル（GPT）ダイナミックディスク用に最大 17 TB • マスターブートレコード（MBR）ディスク用に 2 TB **メモ** これらの要件は、Windows Server オペレーティングシステムに表示されるディスクの最大サイズに基づいています。

関連項目

ネットワーク要件

セキュリティ要件

ソフトウェアの前提条件

ソフトウェアの前提条件

System Center Data Protection Manager (DPM) 2007 の完全インストールには、DPM サーバーのオペレーティングシステム、DPM 前提条件ソフトウェア、および DPM アプリケーションが含まれています。DPM によって保護される各コンピュータは、保護されるコンピュータのソフトウェア要件を満たしている必要があります。

本項の内容

- DPM サーバーのオペレーティングシステムの前提条件
- DPM サーバーのソフトウェアの前提条件
- 保護されるコンピュータのソフトウェアの前提条件
- 前提条件ソフトウェアの手動によるインストール

DPM サーバーのオペレーティングシステムの前提条件

本項に示されている必要なオペレーティングシステム上に DPM をインストールする前に、次の点に注意してください。

- DPM は、すべてのサポートされている DPM のオペレーティングシステムについて、Standard Edition と Enterprise Edition をサポートしています。
- DPM は 32 ビットおよび x64 ビットのオペレーティングシステムをサポートしています。DPM は ia64 ビットのオペレーティングシステムをサポートしていません。
- x86 32 ビットのオペレーティングシステムには、ボリュームシャドウコピーサービス（VSS）非ページプールの制限があります。10 TB を超えるデータを保護する場合、DPM サーバーは 64 ビットのオペレーティングシステム上で実行されている必要があります。また、VSS 非ページプール使用量は単一ボリュームのサイズに基づいているため、32 ビットのオペレーティングシステム上では、データ量が 4 TB を超える単一ボリュームを保護しないことをお勧めします。

System Center Data Protection Manager (DPM) 2007 のオペレーティングシステムの要件は次のとおりです。

- Windows Server 2003 with Service Pack 2 (SP2) 以降。

  Windows Server 2003 の SP2 をダウンロードするには、「Windows Server 2003 Service Pack 2」（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkID=90633）を参照してください。

  注意

  DPM は、ドメインコントローラとアプリケーションサーバーのどちらとしても使用できない、唯一の目的に使用する専用のサーバー上で実行するように設計されています。

- Windows Server 2003 R2 With SP2。
- Windows Storage Server 2003 With SP2。

  Windows Storage Server 2003 または Windows Storage Server 2003 R2 の SP2 は、OEM から入手してください。
- Windows Storage Server 2003 R2 With SP2。

Windows Server 2003 のインストールについては、「How to Install Windows Server 2003」（Windows Server 2003 のインストール方法）を参照してください。

DPM 管理シェル（タスクベースのスクリプティングをサポートするインタラクティブコマンドラインテクノロジ）は、次のオペレーティングシステムでサポートされています。

- Windows XP Service Pack 2。
- Windows Vista。
- Windows Server 2003 Service Pack 2 (SP2) 以降。

メモ

DPM 管理シェルを DPM サーバー以外の複数のコンピュータにインストールして、複数の DPM サーバーをリモートから管理することも可能です。

関連項目

セキュリティ要件

ネットワーク要件

ハードウェア要件

ソフトウェアの前提条件

Windows Server 2003 のインストール方法

System Center Data Protection Manager (DPM) 2007 のインストールをサポートするには、Windows Server 2003 を正しく設定する必要があります。ご使用のコンピュータに Windows Server 2003 がインストールされていない場合、Windows Server 2003 の購入とインストールの詳細については、Microsoft Windows Server のウェブサイト（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkID=64826）を参照してください。

既定以外の設定を選択するには、Windows Server 2003 のインストール中に次の手順を実行します。

手順

Windows Server 2003 をインストールするには、次の手順を実行します。

1. セットアップで Windows のインストールパーティションをフォーマットするように求められたら、**NTFS** ファイルシステムを選択します。
2. **コンピュータ名**ダイアログボックスで、DPM サーバーの名前を入力します。Active Directory ドメイン内で重複しない名前を入力する必要があります。
3. **ワークグループまたはドメイン名**ダイアログボックスで、保護する予定のコンピュータが含まれているドメインに DPM サーバーを追加します。

   ドメイン間に双方向の信頼を確立する場合は、フォレスト内の複数のドメインにまたがって DPM をインストールできます。ドメイン間に双方向の信頼が確立されていない場合は、各ドメインに個別の DPM サーバーが必要です。DPM 2007 はフォレストを越えた保護をサポートしていません。
4. インストールが完了したら、Windows Server 2003 Service Pack 2 (SP2) を含め、使用可能なすべての Windows Server 2003 サービスパックとアップデートを適用します。

   Windows アップデートはすべて、「Windows Update」（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkID=451）から入手できます。

   Windows Server 2003 SP2 は、「Windows Server 2003 Service Pack 2」（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkID=90633）から入手できます。

関連項目

ハードウェア要件

ネットワーク要件

セキュリティ要件

ソフトウェアの前提条件

DPM サーバーのソフトウェアの前提条件

System Center Data Protection Manager（DPM）サーバーは、唯一の目的に使用する専用のサーバーである必要があります。また、このサーバーはドメインコントローラとアプリケーションサーバーのどちらとしても使用できません。DPM サーバーは、Microsoft Operations Manager (MOM) 2005 と Microsoft System Center Operations Manager 2007 のどちらの管理サーバーとしても使用できません。

DPM をインストールする前に、以下をインストールする必要があります。

- サポート技術情報（KB）940349「Availability of a Volume Shadow Copy Service (VSS) update rollup package for Windows Server 2003 to resolve some VSS snapshot issues」（VSS スナップショットの一部の問題を解決するための Windows Server 2003 用ボリュームシャドウコピーサービス（VSS）更新ロールアップパッケージの可用性）(http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=99034)

メモ

サポート技術情報（KB）940349 をインストールし、DPM サーバーまたは保護されるサーバー、もしくはその両方を再起動したら、DPM 管理コンソール内の保護エージェントをリフレッシュすることをお勧めします。エージェントをリフレッシュするには、**管理** タスク領域で **エージェント** タブをクリックし、コンピュータを選択し、**操作** ウィンドウで **情報の更新** をクリックします。保護エージェントをリフレッシュしないと、エラー ID: 31008 が表示される場合があります。DPM による保護エージェントのリフレッシュは 30 分おきにしか行われないからです。

- Windows PowerShell 1.0（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=87007 から）。
- Windows Server 2008 オペレーティングシステム（プレリリースバージョン）には、単一インスタンス記憶域（SIS）。Windows Server 2008 に SIS をインストールする方法については、「必要な Windows コンポーネントの手動によるインストール」を参照してください。

必要な前提条件ソフトウェアを手動でインストールするには、「前提条件ソフトウェアの手動によるインストール」に詳しく説明されている手順に従ってください。

以下は、DPM アプリケーションのインストール前に DPM セットアップによってインストールされる DPM サーバー前提条件ソフトウェアです。

- Windows Server 2003 Service Pack 2（SP2）サーバーには、Windows Deployment Services（WDS）。

  または

  Windows Storage Server 2003 R2 には SIS。

  メモ

  WDS および SIS がまだインストールされていない場合は、インストール中に Microsoft Windows Server 2003 の製品 CD をセットするように求められます。

- Microsoft .NET Framework 2.0。
- Windows Server 2003 にはインターネットインフォメーションサービス（IIS）6.0 （IIS 6.0 は既定では Windows Server 2003 にインストールされていません）。

- Windows Server 2008（プレリリースバージョン）には IIS 7.0 （IIS 7.0 は既定では Windows Server 2008 にインストールされていません）。SQL Server 2005 をインストールする前に IIS がインストールされていないと、SQL サーバーは SQL Server Reporting Services をインストールしません）。

  注意

  このバージョンの DPM 2007 は、実稼動環境での Windows Server 2008 のインストールをサポートしていません。

  重要

  DPM は、IIS 7.0 によってインストールされる既定のコンポーネントのほかに、すべての IIS 7.0 コンポーネントを必要とします。詳細については、「前提条件ソフトウェアの手動によるインストール」の項の「Windows Server 2008 の必要なコンポーネントのインストール」を参照してください。

- Microsoft SQL Server 2005 ワークステーションのコンポーネント。

  ご使用の DPM データベースには、SQL サーバーの既存のリモートインスタンスを使用できます。SQL サーバーのリモートインスタンスを使用する場合は、**sqlprep.msi** をインストールする必要があります。

  リモートコンピュータ上で SQL サーバーのインスタンスを使用するには、**sqlprep.msi** を実行します。これは、DPM の製品 DVD の **DPM2007\msi\SQLprep** フォルダにあります。

  SQL Server サービスと SQL Server Agent サービスの実行に使用するユーザーアカウントが、SQL Server のインストール場所に対する読み取りと実行の権限を持つことを確認してください。

メモ

SQL サーバーのリモートインスタンスを、ドメインコントローラとして実行されているコンピュータ上に置くことはできません。

- Microsoft SQL Server 2005 with Reporting Services。

  リモート SQL サーバーに SQL Server Reporting Services がインストールされている場合、DPM セットアップはその Reporting Service を使用します。SQL サーバーを実行しているリモートコンピュータに SQL Server Reporting Services がインストールされていない場合は、SQL サーバーを実行しているリモートコンピュータにサービスをインストールし、設定する必要があります。

  メモ

  DPM 2007 には、SQL Server 2005 の Standard Edition が含まれています。

- Microsoft SQL Server 2005 Service Pack 2。

関連項目

ハードウェア要件
ネットワーク要件
セキュリティ要件

保護されるコンピュータのソフトウェアの前提条件

System Center Data Protection Manager (DPM) 2007 によって保護される各コンピュータは、次の表に示す要件を満たしている必要があります。保護されるボリュームは、NTFS ファイルシステムとしてフォーマットする必要があります。DPM は、FAT または FAT32 としてフォーマットされているボリュームを保護できません。また、DPM で保護するには、ボリュームのサイズは 1 GB 以上である必要があります。DPM はボリュームシャドウコピーサービス（VSS）を使用して、保護されるデータのスナップショットを作成します。また、VSS はボリュームのサイズが 1 GB 以上である場合に限りスナップショットを作成します。

保護されるコンピュータに保護エージェントをインストールする前に、修正プログラム 940349 を適用する必要があります。詳細については、サポート技術情報（KB）940349「Availability of a Volume Shadow Copy Service (VSS) update rollup package for Windows Server 2003 to resolve some VSS snapshot issues」（VSS スナップショットの一部の問題を解決するための Windows Server 2003 用ボリュームシャドウコピーサービス（VSS）更新ロールアップパッケージの可用性）(http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=99034) を参照してください。

メモ

サポート技術情報（KB）940349 をインストールし、DPM サーバーまたは保護されるサーバー、もしくはその両方を再起動したら、DPM 管理コンソール内の保護エージェントをリフレッシュすることをお勧めします。エージェントをリフレッシュするには、**管理** タスク領域で **エージェント** タブをクリックし、コンピュータを選択し、**操作** ウィンドウで **情報の更新** をクリックします。保護エージェントをリフレッシュしないと、エラー ID: 31008 が表示される場合があります。DPM による保護エージェントのリフレッシュは 30 分おきにしか行われないからです。

保護されるコンピュータの要件

保護されるコンピュータ	コンピュータの要件
ファイルサーバー	次のいずれかのオペレーティングシステムを使用しているファイルサーバーを保護できます。 • Windows Server 2003 With Service Pack 1 (SP1) 以降 • Windows Server 2003 x64 • Windows Server 2003 R2 • Windows Server 2003 R2 x64 • Windows Storage Server 2003 With SP1 以降 **メモ** Windows Storage Server 2003 の SP1 は、OEM から入手してください。 • Windows Storage Server 2003 R2 • Windows Storage Server 2003 R2 x64 • Windows Server 2008 オペレーティングシステム（プレリリースバージョン）。 **メモ** DPM は、必要なオペレーティングシステムのすべてについて、Standard Edition と Enterprise Edition をサポートしています。
SQL サーバーが実行されているコンピュータ	• Microsoft SQL Server 2000 With Service Pack 4（SP4） または • Microsoft SQL Server 2005 With SP1/Service Pack 2（SP2） **メモ** DPM は、SQL サーバーの Standard/Enterprise/Workgroup/Express Edition をサポートしています。 **重要** SQL サーバーのデータの保護を開始する前に、SQL Server 2005 SP1 が実行されているコンピュータ上で SQL Server VSS Writer Service を開始する必要があります。SQL Server VSS Writer Service は、SQL Server 2005 が実行されているコンピュータ上では、既定でオンになっています。SQL Server VSS Writer Service を開始するには、**サービス** コンソールで **SQL Server VSS writer** を右クリックし、**開始** をクリックします。

保護されるコンピュータ	コンピュータの要件
Exchange Server が実行されているコンピュータ	• Exchange Server 2003 With SP2 または • Exchange Server 2007 **メモ** DPM は、Exchange Server の Standard Edition と Enterprise Edition をサポートしています。 • クラスタ連続レプリケーション（CCR）構成の Exchange Server 2007 データを保護するには、事前に修正プログラム 940006 をインストールする必要があります。詳細については、サポート技術情報 940006「Description of Update Rollup 4 for Exchange 2007」（Update Rollup 4 for Exchange 2007 の説明）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=99291）を参照してください。 **重要** • 最新エディションの Exchange Server にインストールされている eseutil.exe と ese.dll のバージョンは、DPM サーバーにインストールされているものと同じバージョンである必要があります。 • また、アップグレードまたはアップデートを適用した後で、Exchange Server が実行されているコンピュータ上で eseutil.exe と ese.dll をアップデートした場合、DPM サーバー上のこれらのファイルをアップデートする必要があります。 • eseutil.exe と ese.dll のアップデートの詳細については、「Eseutil.exe と Ese.dll」を参照してください。
仮想サーバーが実行されているコンピュータ	• Microsoft Virtual Server 2005 R2 SP1 **メモ** オンラインバックアップ用の仮想コンピュータを保護するには、バージョン 13.715 of Virtual Machine Additions（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=84271）をインストールすることをお勧めします。

保護されるコンピュータ	コンピュータの要件
Windows SharePoint Services	• Windows SharePoint Services 3.0 • Microsoft Office SharePoint Server 2007 Windows SharePoint Services（WSS）のデータを保護するには、事前に次の処理を行う必要があります。 • サポート技術情報 941422「Update for Windows SharePoint Services 3.0」（Windows SharePoint Services 3.0 のアップデート）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=100392）のインストール。 • WSS サーバーで WSS Writer サービスを開始し、次に保護エージェントに WSS ファームの資格情報を提供します。詳細については、「Configuring DPM 2007」（DPM 2007 の構成）の「Starting and Configuring the WSS VSS Writer Service」（WSS VSS Writer サービスの開始と構成）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=91852）を参照してください。 • SQL Server 2005 のインスタンスの SQL Server 2005 SP2 へのアップデート。
共有ディスクのクラスタ	• ファイルサーバー • SQL Server 2000 With SP4 • SQL Server 2005 With SP1 • Exchange Server 2003 With SP2 • Exchange Server 2007
非共有ディスクのクラスタ	• Exchange Server 2007
ワークステーション	• Windows XP Professional SP2 • Home 以外のすべての Windows Vista エディション（ドメインのメンバーであること）

Eseutil.exe と Ese.dll

最新エディションの Exchange Server が実行されているコンピュータにインストールされている Exchange Server データベースユーティリティ（eseutil.exe）と ese.dll のバージョンは、DPM サーバーにインストールされているのと同じバージョンである必要があります。たとえば、Exchange Server 2003 SP2、Exchange Server 2007、および Exchange Server 2007 SP1 を保護する場合は、Exchange Server 2007 SP1 が実行されているコンピュータから DPM サーバーに eseutil.exe と ese.dll をコピーする必要があります。

DPM サーバーの **<ドライブ文字>:\Program Files\Microsoft DPM\DPM** フォルダにインストールする必要のある eseutil.exe と ese.dll のバージョンは、次のシナリオによって決まります。

eseutil.exe および ese.dll のバージョンを決めるシナリオ

以下を保護する DPM サーバー	DPM プロセッサの種類	eseutil.exe および ese.dll の Exchange Server バージョンのコピー元
• Exchange Server 2007（64 ビット）	32 ビット **メモ** 32 ビットのコンピュータ上では 64 ビットの DLL は使用できません。	Exchange Server 2007
• Exchange Server 2007（64 ビット） *および* • Exchange Server 2007（64 ビット）および Exchange Server 2003	32 ビット **メモ** Exchange Server 2007 バージョンのバイナリは、Exchange Server 2007 および Exchange Server 2003 の両方のデータベースのバージョンで使用できます。	Exchange Server 2007（32 ビットバージョン） このバージョンは、Exchange Server 2007 のセットアップ DVD または Exchange Server TechCenter のウェブサイト（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId= 83451）から入手できます。
• Exchange Server 2007（64 ビット） *または* • Exchange Server 2007（64 ビット）および Exchange Server 2003	64 ビット	Exchange Server 2007
• Exchange Server 2003	32 ビット	Exchange Server 2003
• Exchange Server 2003	64 ビット **メモ** 32 ビットのファイルは Exchange Server 2003 を実行しているコンピュータから 64 ビットのプロセッサが搭載された DPM サーバーにコピーできます。	Exchange Server 2003

関連項目

ハードウェア要件
ネットワーク要件
セキュリティ要件
ソフトウェアの前提条件

DPM 2007 のインストール

System Center Data Protection Manager (DPM) 2007 をインストールする手順には、DPM 前提条件ソフトウェアと DPM アプリケーションのインストールが含まれています。DPM のセットアップウィザードの指示に従って DPM のインストールの設定を行えば、内蔵 DPM のインストール処理の一部として、前提条件ソフトウェアのインストールが自動的に行われるか、または同ソフトウェアのインストールを行うリンクが提供されます。インストール処理の全体を通じて、DPM セットアップはインストールの進行状況を示します。

重要

DPM 2007 では、DPM のクリーンインストールを行う必要があります。DPM 2007 をインストールする前に、DPM の旧バージョンに加えて、System Center Data Protection Manager 2006（DPM 2006）および関連する前提条件ソフトウェアをアンインストールする必要があります。DPM 2006 と DPM 2007 ではアーキテクチャが異なるため、DPM 2006 が実行されているコンピュータを DPM 2007 に直接アップグレードすることはできません。ただし、DPM 2007 には DPM 2006 の保護グループ構成を DPM 2007 に移行することの可能なアップグレードツールが用意されています。DPM 2006 から DPM 2007 へのアップグレードの詳細については、「Upgrading DPM 2006 to DPM 2007」（DPM 2006 から DPM 2007 へのアップグレード）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=66737）を参照してください。

Windows Server 2003 オペレーティングシステムが実行されているコンピュータでは、インターネットインフォメーションサービス（IIS）6.0 と単一インスタンス記憶域（SIS）がインストールされていない場合、インストール中に DPM の製品 DVD をセットするように求められます。既定では、Windows Server 2003 のインストール後は IIS や SIS をインストールできない設定になっています。Windows Storage Server に DPM をインストールする場合、既定では SIS はインストールされます。

メモ

このバージョンの DPM 2007 は、実稼動環境での Windows Server 2008 オペレーティングシステム（プレリリースバージョン）のインストールをサポートしていません。

DPM のセットアップウィザードは、DPM の製品 DVD から DPM 前提条件ソフトウェアをインストールするように設計されています。DPM のインストールに前提条件の（1 つまたは複数の）製品の製品版のコピーを使用する場合は、DPM のセットアップウィザードを開始する前に製品を手動でインストールします。前提条件ソフトウェアのインストールの設定の詳細については、「前提条件ソフトウェアの手動によるインストール」を参照してください。

DPM およびその前提条件ソフトウェアは、DPM の製品 DVD または DPM の製品 DVD の内容をコピーしたネットワーク共有からインストールできます。ネットワーク共有からインストールする場合、共有には DPM の製品 DVD の正確なディレクトリ構造が複製されている必要があります。共有フォルダからの DPM のインストールは、共有が信頼済みサイト上でホストされている場合にのみ行ってください。

重要

共有フォルダから DPM または前提条件ソフトウェア製品をインストールする場合、インストール中、共有フォルダの UNC（Universal Naming Convention）パスが Internet Explorer のローカルイントラネットセキュリティゾーンに追加されます。

メモ

DPM 2007 をExchange Server が実行されているのと同じコンピュータにインストールすることはできません。

DPM は 32 ビットおよび x64 ビットのオペレーティングシステムをサポートしています。DPM 32 ビットバージョンは 32 ビットのオペレーティングシステムにのみ、DPM 64 ビットバージョンは x64 ビットのオペレーティングシステムにのみインストールできます。

DPM セットアップは、DPM 2007 をインストールする前にリムーバブル記憶域サービスを停止します。

DPM のインストールは次の手順で行います。

1. ローカル Administrators グループのメンバーであるドメインユーザーアカウントを使用して、DPM サーバーにログオンします。
2. DPM の製品 DVD を DVD-ROM ドライブにセットします。DPM のセットアップウィザードが自動的に起動しない場合は、DVD のルートフォルダにある **Setup.exe** をダブルクリックします。

   または

   ネットワーク共有から DPM をインストールする場合は、インストール共有に移動し、共有のルートフォルダにある **Setup.exe** をダブルクリックします。
3. **Microsoft System Center Data Protection Manager 2007**画面で、**Data Protection Manager のインストール** をクリックします。

4. **マイクロソフトソフトウェアライセンス条項**ページで、ライセンス契約を読みます。条件に同意される場合は、**ライセンス契約に同意します** をクリックし、次に **OK** をクリックします。

   ライセンス契約は、メモ帳などのテキストエディタに貼り付けて印刷することができます。インストールが完了したら、ナビゲーションバーの製品情報アイコンをクリックすれば DPM 管理者コンソールからライセンス契約にアクセスできます。

   メモ

   Microsoft .NET Framework 2.0 がインストールされていない場合は、DPM によってインストールされます。

5. **ようこそ** ページで、**次へ** をクリックします。

   DPM は、必要なハードウェアとソフトウェアのすべてに関する前提条件の確認を開始します。

6. **前提条件の確認**ページで、システムがソフトウェアとハードウェアの要件を満たしていることが DPM セットアップによって確認されるまで待機します。

   - 必要なコンポーネントがすべて揃っていれば、DPM セットアップに確認のメッセージが表示されます。 **次へ** をクリックして続行します。
   - 必要なコンポーネントまたは推奨コンポーネントが 1 つでも欠けていたり、非準拠である場合は、警告またはエラーメッセージが表示されます。

     警告： 推奨コンポーネントが欠けているか、または非準拠であることを示します。警告を読み、問題をすぐに解決するかインストールを続行するかを決めてください。インストールを続行する場合は、できるだけ早く問題解決の計画を立ててください。

     エラー： 必要なコンポーネントが欠けているか、または非準拠であることを示します。インストールを続行する前にエラーを解決する必要があります。

7. **製品登録**ページで、登録情報を入力します。 **保護エージェントのライセンス** セクションで、次の手順を行います。

   a. **Standard ライセンス** ボックスで、ファイルリソースとシステム状態の保護を認証するために購入したライセンスの数を入力します。

   b. **Enterprise ライセンス** ボックスで、ファイルリソースとアプリケーションリソースの両方の保護を認証するために購入したライセンスの数を入力します。

   メモ

   DPM のセットアップ後に追加のライセンスを購入したか、または 1 台の DPM サーバーから別の DPM サーバーにライセンスを再割り当てする場合は、DPM 管理者コンソール内の各 DPM サーバーについて使用可能なライセンスの数を更新できます。保護エージェントのライセンスのアップデートについては、DPM 2007 のヘルプで、「How to Update DPM License Information」（DPM ライセンス情報のアップデート方法）を参照してください。

8. **インストールの設定**ページの **DPM プログラムファイル** セクションで、既定のフォルダをそのまま使用するか、または **変更** をクリックして、DPM をインストールするフォルダに移動します。

   DPM はローカルドライブにのみインストールできます。また、読み取り専用フォルダ、隠しフォルダにインストールすることも、Documents and Settings や Program Files など、ローカルの Windows フォルダに直接インストールすることもできません（ただし、DPM を Program Files フォルダのサブフォルダにインストールすることは可能です）。

   重要

   インストールパーティションは、NTFS ファイルシステムでフォーマットする必要があります。システムパーティションに障害が発生した場合の回復を容易にするには、DPM をシステムパーティションとは別のパーティションにインストールします。

9. **インストールの設定**ページの **SQL サーバーの設定** セクションで、Microsoft SQL Server の MS$DPM2007$ インスタンスを DPM の製品 DVD からインストールするのか、それとも既存のSQL サーバーのローカルまたはリモートインスタンスにインストールするのかを指定します。SQL サーバーのリモートインスタンスをインストールする方法の詳細については、「Manually Install SQL Server 2005」（SQL Server 2005 の手動によるインストール）(http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=102396) を参照してください。

   既存の MS$DPM2007$ インスタンスを使用する場合は、専用インスタンスのオプションを選択して、DPM と一緒にインストールされる SQL サーバーのインスタンスを使用します。ローカルの MS$DPM2007$ インスタンス以外のインスタンスを使用する場合は、**SQL サーバーの設定** ページで SQL Server 2005 の別のインスタンスを選択します。

   DPM のインストールで SQL サーバーの既存のインスタンスを使用する場合は、次の点に注意してください。

   - SQL サーバーのリモートインスタンスを、ドメインコントローラとして実行されているコンピュータ上に置くことはできません。
   - SQL サーバーを実行しているコンピュータと DPM サーバーは、同じドメインに置かれている必要があります。
   - DPM セットアップは、DPMDBReaders$<DPM サーバー名> および DPMDBAdministrators$<DPM サーバー名> ローカルグループを SQL サーバーのリモートインスタンス上に作成します。SQL サーバーのリモートインスタンスを使用するには、DPM 管理者をこれらのグループに追加する必要があります。
   - SQL サーバーのリモートインスタンスには、SQL サーバーデータベースエンジンとレポートサービスのコンポーネントも含めて、IIS 6.0 および SQL Server 2005 Standard/ Enterprise Edition With SP2 が実行されている必要があります。

SQL サーバーのリモートインスタンスには、次の設定を使用することをお勧めします。

- 失敗の監査の既定の設定。
- 既定の Windows 認証モード。
- **sa** アカウントに強力なパスワードを設定する。
- パスワードポリシーのチェックを有効にする。
- SQL サーバーデータベースエンジンとレポートサービスのコンポーネントのみをインストールする。
- 特権の最も低いユーザーアカウントを使用して SQL サーバーを実行する。

10. **インストールの設定**ページの **必要な領域** セクションには、指定したドライブ上で使用できる空き領域が表示されます。インストール先のフォルダを変更する場合は、選択したドライブにインストールに十分な空き領域があることを確認します。DPM サーバーの最小ハードウェア要件は次のとおりです。

コンポーネント	最小要件
システムドライブ	2650 MB **メモ** SQL サーバーのインスタンスを DPM ダウンロードパッケージからインストールする場合は、システムドライブのディスク領域要件として、これだけの容量が必要です。SQL サーバーの既存のインスタンスを使用する場合、このディスク領域要件はかなり軽減されます。
プログラムファイルのドライブ	620 MB
データベースファイルのドライブ	900 MB

DPM の製品 DVD からインストールするのではなく、SQL サーバーの既存のインスタンスを使用する場合は、**SQL サーバーの設定** ページが表示されます。

- **SQL サーバーのインスタンス** ボックスで、使用する SQL サーバーの既存のインスタンスの名前と適切な管理者の資格情報を入力し、**次へ** をクリックします。

  メモ

  リモート SQL サーバーに SQL Server Reporting Services がインストールされている場合、DPM セットアップはその Reporting Service を使用します。SQL サーバーを実行しているリモートコンピュータに SQL Server Reporting Services がインストールされていない場合は、DPM セットアップを続行する前に、SQL サーバーを実行しているリモートコンピュータにサービスをインストールし、設定する必要があります。

11. **セキュリティの設定**ページで、制限された MICROSOFTDPMAcct および DPMR$<コンピュータ名> ローカルユーザーアカウントに強力なパスワードを指定し、確認のためにもう一度入力した後で、**次へ** をクリックします。

    セキュリティの理由から、DPM は MICROSOFTDPMAcct アカウントの下で SQL サーバーと SQL Server Agent サービスを実行します。このアカウントは、DPM のインストール中に DPM セットアップによって作成されるものです。レポートを安全に生成するために、DPM は DPMR$<コンピュータ名> アカウントを作成します。

    強力なパスワードとは通常、6 文字以上で、ユーザーのアカウント名の全部または一部を含まず、次の 4 つの文字カテゴリのうち、少なくとも 3 つを含むパスワードのことです：大文字、小文字、1 ～ 9 の数字、および（!、@、# などの）記号。

    メモ

    これらのアカウントに指定するパスワードに有効期限はありません。

12. **Microsoft Update Opt-In**ページで、Microsoft Update サービスにサインアップするかどうかを指定し、**次へ** をクリックします。

    Microsoft Update Opt-In の決定は、DPM 2007 のインストール後にいつでも変更できます。Microsoft Update Opt-In の決定を変更する方法については、Microsoft Update のウェブサイト（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=74122）を参照してください。

13. **カスタマエクスペリエンス向上プログラム**ページで、カスタマエクスペリエンス向上プログラム（CEIP）に参加するかどうかを指定し、**次へ** をクリックします。

14. **設定の概要**ページで、インストール設定の概要を確認します。指定した設定を使用して DPM をインストールするには、**インストール** をクリックします。設定を変更するには、**戻る** をクリックします。

    インストールが完了すると、**インストール** ページにインストール状況が表示されます。

15. DPM セットアップによって行ったすべての変更を反映するには、**閉じる** をクリックし、コンピュータを再起動します。

メモ

この再起動は、DPM がブロックレベルの変更を追跡し、その変更を DPM と保護されるコンピュータの間で、またはプライマリおよびセカンダリ DPM サーバーの間で転送するために使用するボリュームフィルタをロードするのに必要です。

前提条件ソフトウェアの手動によるインストール

System Center Data Protection Manager (DPM) 2007 のインストールに前提条件の（1 つまたは複数の）製品の製品版のコピーを使用する場合、または、DPM の前提条件ソフトウェア製品（1 つまたは複数）の自動インストールが失敗した場合には、前提条件ソフトウェアを手動でインストールできます。

DPM の製品 DVD から前提条件ソフトウェア製品をインストールする場合は、本項の手順に従います。製品版を使用して前提条件ソフトウェア製品をインストールする場合は、マニュアルに示されている設定情報を使用して、ソフトウェアを DPM 用に正しく設定します。

DPM をインストールする前に、以下のソフトウェアを下記の順序でインストールする必要があります。

- 前提条件ソフトウェアのインストール
- 必要な Windows コンポーネントの手動によるインストール
- SQL Server 2005 の手動によるインストール
- SQL Server 2005 SP2 の手動によるインストール

関連項目

ハードウェア要件

ネットワーク要件

セキュリティ要件

ソフトウェアの前提条件

前提条件ソフトウェアのインストール

必要な Windows コンポーネントと Microsoft SQL Server 2005 をインストールする前に、http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=87007 から Windows PowerShell 1.0 をインストールする必要があります。

保護されるコンピュータに保護エージェントをインストールする前に、修正プログラム 940349 を適用する必要があります。詳細については、サポート技術情報（KB）940349「Availability of a Volume Shadow Copy Service (VSS) update rollup package for Windows Server 2003 to resolve some VSS snapshot issues」（VSS スナップショットの一部の問題を解決するための Windows Server 2003 用ボリュームシャドウコピーサービス（VSS）更新ロールアップパッケージの可用性）(http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=99034) を参照してください。

メモ

サポート技術情報（KB）940349 をインストールし、保護されるサーバーを再起動したら、DPM 管理コンソール内の保護エージェントをリフレッシュすることをお勧めします。エージェントをリフレッシュするには、**管理** タスク領域で **エージェント** タブをクリックし、コンピュータを選択し、**操作** ウィンドウで **情報の更新** をクリックします。保護エージェントをリフレッシュしないと、エラー ID: 31008 が表示される場合があります。DPM による保護エージェントのリフレッシュは 30 分おきにしか行われないからです。

関連項目

ハードウェア要件
ネットワーク要件
セキュリティ要件
ソフトウェアの前提条件

必要な Windows コンポーネントの手動によるインストール

Microsoft SQL Server 2005 をインストールする前に、必要な Windows コンポーネントをインストールする必要があります。

本項には、Windows Server 2003 のコンポーネントと Windows Server 2008 オペレーティングシステム（プレリリースバージョン）のコンポーネントをインストールする手順が説明されています。Windows Server 2008 の Windows コンポーネントをインストールする手順は、Windows Server 2003 で使用する手順とは大きく異なります。

Windows Server 2003 の必要なコンポーネントのインストール

Windows Server 2003 の必要なコンポーネントは次のとおりです。

- ASP.NET。
- ネットワーク COM+ アクセス。
- Windows Server 2003 にはインターネットインフォメーションサービス（IIS）6.0 （IIS 6.0 は既定では Windows Server 2003 にインストールされていません）。

メモ

SQL Server 2005 をインストールする前に IIS がインストールされていないと、SQL サーバーは SQL Server Reporting Services をインストールしません。

- Windows Server 2003 Service Pack 2（SP2）サーバーには、Windows Deployment Services（WDS）。

  または

  Windows Storage Server R2 上の単一インスタンス記憶域（SIS）。

Windows Server 2003 の必要なコンポーネントをインストールするには、次の手順に従います。

1. **コントロールパネル**で、**プログラムの追加と削除** を選択します。
2. **プログラムの追加と削除**ダイアログボックスで、**Windows コンポーネントの追加と削除** をクリックします。
3. **Windows コンポーネントウィザード**で、**アプリケーションサーバー** を選択し、**詳細** をクリックします。
4. **アプリケーションサーバー**ダイアログボックスで **ASP.NET** を選択し、**インターネットインフォメーションサービス（IIS）**を選択し、**OK** をクリックします。
5. Windows Server 2003 SP2 サーバーに DPM をインストールする場合は、**Windows コンポーネントウィザード** で、**Windows Deployment Services** を選択します。

   または

   Windows Storage Server R2 に DPM をインストールする場合は、**そのほかのネットワークファイルと印刷サービス** を選択し、**詳細** をクリックし、**単一インスタンス記憶域** をクリックし、**OK** をクリックします。
6. **Windows コンポーネントウィザード**で、**次へ** をクリックします。
7. インストールが完了したら、**完了** をクリックします。

Windows Server 2008（プレリリースバージョン）の必要なコンポーネントのインストール

Windows Server 2008 の必要なツールとワークステーションのコンポーネントは、次のとおりです。

- PowerShell 1.0

  IIS 7.0 をインストールする前に、Windows PowerShell 1.0 をインストールする必要があります。
- Windows Server 2008 オペレーティングシステム（プレリリースバージョン）には IIS 7.0（IIS 7.0 は既定では Windows Server 2008 にインストールされていません）。

メモ

SQL Server 2005 をインストールする前に IIS がインストールされていないと、SQL サーバーは SQL Server Reporting Services をインストールしません。

- 単一インスタンス記憶域（SIS）

Windows PowerShell 1.0 のインストールは、次の手順で行います。

1. スタート をクリックし、**管理ツール** をポイントし、**Server Manager** をクリックします。
2. サーバーマネージャを **機能** ノードまで展開し、**機能** を選択します。
3. **機能**ウィンドウで、**機能の追加** をクリックします。
4. **Windows PowerShell**を選択し、**次へ** をクリックします。
5. **インストールの選択項目の確認**ページで、**インストール** をクリックします。

Windows Server 2008 に必要な既定のコンポーネントのほかに、DPM はすべての IIS 7.0 コンポーネントを必要とします。

IIS 7.0 および必要なサービスをインストールするには、次の手順に従います。

1. スタート をクリックし、**管理ツール** をポイントし、**Server Manager** をクリックします。
2. サーバーマネージャを **役割** ノードまで展開し、**役割** を選択します。
3. **役割**ウィンドウで、**役割の追加** をクリックします。
4. **役割の追加ウィザード**の **開始する前に** ページで、**次へ** をクリックします。
5. **サーバーの役割の選択**ページで、**Web サービス (IIS)** を選択します。
6. **Web サーバー (IIS) に必要な機能を追加しますか?** メッセージボックスで、**必要な機能を追加する** をクリックします。

   メモ

   確認のメッセージが表示されたら、Windows Process Activation サービス（WAS）を追加します。WAS は、HTTP 以外の転送プロトコルで使用できる IIS 機能の汎化である新しいプロセスアクティベーションサービスです。
7. **次へ**をクリックし、**次へ** を再度クリックします。
8. **役割サービスの選択**ページで、役割サービスのすべてを選択します。
9. **次へ**をクリックし、**インストール** をクリックします。

SIS のインストールは次の手順で行います。

1. 管理者のコマンドプロンプトから、**start /wait ocsetup.exe SIS-Limited/quiet/norestart** と入力します。
2. インストールが完了したら、コンピュータを再起動する必要があります。

関連項目

ハードウェア要件

ネットワーク要件

セキュリティ要件

ソフトウェアの前提条件

SQL Server 2005 の手動によるインストール

SQL Server 2005 Standard/Enterprise Edition をインストールするには、SQL Server 2005 のインストールウィザードを使用してセットアップを実行するか、またはコマンドプロンプトからインストールします。SQL Server 2005 のインスタンスにコンポーネントを追加したり、SQL サーバーの旧バージョンから SQL Server 2005 にアップグレードする方法も可能です。

SQL サーバーのリモートインスタンスにクリーンインストールを行うか、または、DPM のために SQL サーバーの専用インスタンスをインストールする場合には、次の設定を使用することをお勧めします。

- 失敗の監査の既定の設定を使用する。
- 既定の Windows 認証モードを使用する。
- **sa** アカウントに強力なパスワードを設定する。
- パスワードポリシーのチェックを有効にする。
- SQL サーバーデータベースエンジンとレポートサービスのコンポーネントのみをインストールする。
- SQL サーバーが実行されているコンピュータには、特権の最も低いユーザーアカウントを使用する。

SQL Server 2005 のインストールは次の手順で行います。

1. **Microsoft Data Protection Manager 2007** の製品 DVD を DVD ドライブにセットします。
2. Windows Explorer で **<DVD ドライブ>:\SQLSVR2005\Servers** に移動し、**setup.exe** を実行します。
3. **Microsoft SQL Server 2005 使用承諾契約書**ページで、ライセンス契約を読みます。条件に同意される場合は、**ライセンス契約に同意します** をクリックし、**次へ** をクリックします。
4. **インストールの前提条件**ページで、**インストール** をクリックして SQL サーバーが必要とするソフトウェアをインストールし、**次へ** をクリックします。 **Microsoft SQL Server 2005 セットアップウィザード** が起動します。
5. **Microsoft SQL Server インストールウィザードへようこそ**ページで、**次へ** をクリックします。
6. **システム構成チェックページ**で、構成が成功していることを確認し、**次へ** をクリックします。
7. **登録情報**ページで、登録情報を入力し、**次へ** をクリックします。
8. **インストールするコンポーネント** ページで、**詳細** をクリックします。

9. **機能の選択**ページで、次の機能を選択します。
   - **データベースサービス**。

     データベースサービス 機能を展開し、**データファイル** を選択します。 **共有ツール** も選択されていることを確認します。
   - **レポートサービス**。

     ローカルハードドライブにすべてインストール を選択します。
   - **クライアントコンポーネント**。

     クライアントコンポーネント 機能を展開し、**管理ツール** を選択します。
10. **次へ**をクリックします。
11. **インスタンス名**ページで、**名前付きインスタンス** を選択し、**MS$DPM2007$** と入力し、**次へ** をクリックします。

    DPM 用の専用インスタンスを使用しない場合、または SQL サーバーを別のコンピュータにインストールする場合は、別のインスタンス名を使用できます。

    メモ

    DPM では、2 台の DPM サーバーを、同一コンピュータ上の SQL サーバーの2 つの異なるインスタンスにポイントできます。
12. **サービスアカウント**ページで次の手順を行います。
    a. **サービスアカウントごとにカスタマイズ** を選択します。
    b. **サービス** ボックスで、**SQL サーバー** を選択します。
    c. **ビルトインシステムアカウントを使用する** を選択し、ユーザーアカウント を選択します。
    d. **サービス** ボックスで、**SQL サーバーエージェント** を選択します。
    e. **ビルトインシステムアカウントを使用する** を選択し、ユーザーアカウント を選択します。
    f. **サービス** ボックスで、**レポートサービス** を選択します。
    g. **ビルトインシステムアカウントを使用する** を選択し、**ネットワークサービス** を選択します。
    h. **サービス** ボックスで、**SQL ブラウザ** を選択します。
    i. **ビルトインシステムアカウントを使用する** を選択し、ユーザーアカウント を選択します。
13. **次へ**をクリックします。
14. SQL Server ウィザードの以降のページの指示に従い、既定の設定をすべて受け入れます。
15. **インストールの準備完了**ページで、**インストール** をクリックしてインストールを開始します。

インストールを完了した後で、SQL Server 2005 が実行されていることを確認します。

SQL Server 2005 が実行されていることを確認するには、次の手順に従います。

1. スタート メニューで、**すべてのプログラム**、**Microsoft SQL Server 2005**、**構成ツール** の順にポイントし、**SQL Server 構成マネージャ** をクリックします。
2. SQL Server 構成マネージャ で、**SQL Server (MS$DPM2007$)** サービスが実行されていることを確認します。

関連項目

ハードウェア要件
ネットワーク要件
セキュリティ要件
ソフトウェアの前提条件

SQL Server 2005 SP2 の手動によるインストール

Microsoft SQL Server 2005 SP2 には、SQL Server 2005 の機能に対するアップデートが提供されています。

SQL Server 2005 SP2 のインストールは次の手順で行います。

1. の**Microsoft Data Protection Manager 2007**製品 DVD を DVD ドライブにセットします。
2. Windows Explorer で、次のフォルダに移動します。
   - 32 ビットプラットフォームでは、**<DVD ドライブ>:\SQLSVR2005SP2**。次に、**SQLServer2005SP2-KB921896-x86-ENU.exe** を実行します。
   - 64 ビットプラットフォームでは、**<DVD ドライブ:>\SQLSVR2005SP2**。次に、**SQLServer2005SP2-KB921896-x64-ENU.exe** を実行します。

   Microsoft SQL Server 2005 Service Pack 2 セットアップウィザード が起動します。
3. **ようこそ** ページで、**次へ** をクリックします。
4. **Microsoft SQL Server 2005 SP2 使用承諾契約書**ページで、ライセンス契約を読みます。条件に同意される場合は、**ライセンス契約に同意します** をクリックし、**次へ** をクリックします。
5. SQL Server ウィザードの以降のページの指示に従って既定の設定をすべて受け入れ、**インストールの準備完了** ページで、**インストール** をクリックしてインストールを開始します。

関連項目

ハードウェア要件
ネットワーク要件
セキュリティ要件
ソフトウェアの前提条件

DPM 2007 の修復

本項では、System Center Data Protection Manager (DPM) 2007 の修復に必要な操作と以下の情報について説明します。

- DPM 2007 をインストールする前に行うタスク
- DPM をすぐに再インストールする計画がない場合のタスク
- 修復処理中に保護ジョブはどうなるか
- DPM の修復を正常に行うための手順
- インストール完了後のタスク

Microsoft Windows レジストリ、システムファイル、インターネットインフォメーションサービス（IIS）、または DPM バイナリが万一破損した場合は、DPM 2007 を再インストールすることで修復できます。DPM 2007 を再インストールするには、データ保護構成を保持するオプションを使用してアプリケーションをアンインストールし、DPM セットアップを再度実行します。

ほとんどの場合、DPM を再インストールするために DPM 前提条件ソフトウェアをアンインストールする必要はありません。ただし、Microsoft SQL Server 2005 バイナリが破損した場合は、SQL Server 2005 もアンインストールと再インストールが必要になる可能性があります。

DPM を再インストールするために、保護されるコンピュータから保護エージェントをアンインストールする必要はありません。

重要

DPM 2007 の再インストールを開始する前に、テープまたはその他のリムーバブル記憶域メディアに DPM データベース、レポートデータベース、およびレプリカのアーカイブを取っておくことを強くお勧めします。手順については、『DPM Operations Guide』（DPM の操作ガイド）で「Disaster Recovery」（障害回復）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=91860）を参照してください。

修復操作のアンインストール部分が完了した直後に DPM 2007 を再インストールする計画がない場合は、次の手順を実行します。

1. DPM サーバー上のエンドユーザー回復を無効にします。
2. 保護グループ内の各ボリュームに同期を実行します。

これらの手順を行えば、サーバーへのアクセスが認められていないユーザーが DPM サーバー上のファイルのレプリカにアクセスすることを防止できます。

修復操作中は、保護ジョブは正常に実行されません。修復操作の進行中に実行されるようにスケジュールされているジョブは、失敗します。修復操作のアンインストール部分が開始された時点で進行中のジョブは、すべてキャンセルされます。修復操作が完了した時点で、キャンセルされたレプリカの作成、同期、または整合性チェックのジョブがあれば、DPM は自動的に再試行しますが、キャンセルされた復旧ポイントの作成ジョブは再試行されません。

DPM の修復を正常に行うには、次の手順を実行する必要があります。

1. DPM データベースのバックアップを取ります。
2. DPM をアンインストールします。
3. DPM データベースを削除します。
4. DPM を再インストールします。
5. DPM データベースを復元します。

DPM データベースのバックアップは次の手順で行います。

1. コマンドプロンプトから、**<ドライブ文字>:\Program Files\Microsoft Data Protection Manager\DPM\bin** にある DPMBackup.exe -db を実行します。
2. バックアッププログラムのコンソールツリーで、**\Program Files\Microsoft Data Protection Manager\DPM\Volumes\ShadowCopy\Database Backups** に移動します。DPM データベースのバックアップのファイル名は、**DPMDB.bak** です。
3. データベースをバックアップするメディアを選択します。
4. バックアップを開始します。

DPM のアンインストールは次の手順で行います。

1. コントロールパネルで、**プログラムの追加と削除** をクリックし、**プログラムの変更と削除** をクリックします。
2. **現在インストールされているプログラム**の下で、**Microsoft System Center Data Protection Manager 2007** を選択し、**変更と削除** をクリックします。
3. **アンインストールオプション**ページで、**データの保持** オプションを選択し、**次へ** をクリックします。
4. **オプションの概要**ページで、**アンインストール** をクリックします。
5. アンインストールが完了したら、**閉じる** をクリックします。

DPM データベースの削除は、次の手順で行います。

1. **スタート**メニューで、**Microsoft SQL Server 2005** をポイントし、**SQL Server Management Studio** をクリックします。
2. <コンピュータ名>\MS$DPM2007$ データベースを選択し、**接続** をクリックします。
3. **データベース**を展開し、**DPMDB** データベースを右クリックし、**削除** をクリックします。
4. **はい**をクリックして削除の確認メッセージを閉じます。

DPM のインストールは次の手順で行います。

- DPM のインストールについては、「DPM 2007 のインストール」を参照してください。

DpmSync ツールを使用して DPM データベースを復元するには、次の手順を実行します。

1. コマンドプロンプトで、**DpmSync -sync** と入力します。
2. 新規のインストールが完了し、データベースが復元された後で、DPM 管理者コンソールの **監視** タスク領域で、修復操作中に失敗した保護ジョブがないか確認します。失敗したジョブがあれば、すべて手動で再開します。
3. 失敗したジョブを再開した後で、すべてのデータソースに対して整合性チェックを実行する必要があります。手動で整合性チェックを行う手順については、DPM 2007 のヘルプの「レプリカを同期する方法」を参照してください。

DPM 2007 のアンインストール

System Center Data Protection Manager (DPM) 2007 をアンインストールする際に、既存の復旧ポイントとレプリカを削除するか保持するかを選択できます。DPM のアンインストール後も DPM サーバー上の復旧ポイントに引き続きアクセスできるようにするには、DPM のアンインストール時にデータ保護構成を保持する必要があります。

重要

DPM のアンインストール後も既存のデータ保護構成を保持する予定の場合は、DPM サーバー上でエンドユーザー回復を無効にした後、アンインストールを開始する前に、保護グループ内の各データソースについて同期ジョブを実行します。これらの手順を行えば、サーバー上のファイルへのアクセスが認められていないユーザーが DPM サーバー上のファイルのレプリカにアクセスすることを防止できます。

DPM 2007 のアンインストール

セットアップを実行しても、アンインストールされるのは DPM アプリケーションのみです。セットアップを実行しても、Windows Server 2008 用の前提条件ソフトウェア、保護エージェント、ユーザー設定、およびワトソン博士は削除されません。DPM アプリケーション、前提条件ソフトウェア、および保護エージェントのアンインストールは、次の順序で行う必要があります。

メモ

DPM のシステム要件をアンインストールした後で、アンインストールを完了するためにコンピュータの再起動が必要です。

手順 1：DPM アプリケーションのアンインストール

DPM のアンインストールは次の手順で行います。

1. コントロールパネルで、**プログラムの追加と削除** をクリックし、**プログラムの変更と削除** をクリックします。
2. **現在インストールされているプログラム**の下で、**Microsoft System Center Data Protection Manager 2007** を選択し、**変更と削除** をクリックします。

   DPM のセットアップウィザードがアンインストールモードで起動します。
3. **アンインストールオプション**ページで、**データの削除** または **データの保持** を選択し、**次へ** をクリックします。
4. **オプションの概要**ページで、**アンインストール** をクリックします。
5. アンインストールが完了したら、**閉じる** をクリックします。

手順 2：DPM 前提条件ソフトウェアのアンインストール

アンインストールする必要がある前提条件ソフトウェアは、以下のとおりです。

- **SQL Server 2005** (MS$DPM2007$) および SQL Server 2005 Reporting Services
- Windows Server 2003 には**インターネットインフォメーションサービス（IIS）6.0**

  または
- Windows Server 2008 オペレーティングシステム（プレリリースバージョン）には **IIS 7.0**

Windows Server 2003 上の SQL Server 2005 および IIS 6.0 をアンインストールするには、次の手順を実行します。

1. コントロールパネルで、**プログラムの追加と削除** をクリックし、**プログラムの変更と削除** をクリックします。
2. **現在インストールされているプログラム**の下で、前提条件ソフトウェアを選択し、**削除** をクリックします。
3. **はい**をクリックして削除の確認メッセージを閉じます。

- **PowerShell 1.0**

Windows Server 2003 上の PowerShell 1.0 をアンインストールするには、次の手順を実行します。

1. コントロールパネルで、**プログラムの追加と削除** をクリックし、**プログラムの変更と削除** をクリックします。
2. **プログラムの追加と削除**画面で、**更新プログラムの表示** にチェックを入れます。
3. **Hotfix for Windows Server 2003 (KB926139)**を選択します。
4. **現在インストールされているプログラム**の下で、前提条件ソフトウェアを選択し、**削除** をクリックします。
5. **はい**をクリックして削除の確認メッセージを閉じます。

Windows Server 2008 上の PowerShell 1.0 をアンインストールするには、次の手順を実行します。

1. スタート をクリックし、**管理ツール** をポイントし、**Server Manager** をクリックします。
2. サーバーマネージャを **機能** ノードまで展開し、**機能** を選択します。
3. **機能**ウィンドウで、**機能の削除** をクリックします。
4. **Windows PowerShell** チェックボックスをクリアし、アンインストールを完了します。

- **単一インスタンス記憶域（SIS）**

Windows Server 2008 上の SIS をアンインストールするには、次の手順を実行します。

1. 管理者のコマンドプロンプトから、**start /w ocsetup.exe SIS-Limited/uninstall/quiet/norestart** と入力します。
2. アンインストールが完了したら、コンピュータを再起動する必要があります。

手順 3：保護エージェントのアンインストール

DPM 管理者コンソールを使用して、保護されるサーバー上に導入されている保護エージェントをアンインストールするには、DPM のアンインストールを開始する前にアンインストールする必要があります。または、DPM のアンインストールを完了した後で、**プログラムの追加と削除**を使用して、保護エージェントをローカルでサーバーからアンインストールすることもできます。

手順 4：ユーザー設定のアンインストール

ユーザー設定を削除するには、DPM のアンインストールを完了した後で、下記の名前のフォルダを削除します。

<ドライブ文字>:\Documents and Settings\<ユーザー名>\Application Data\Microsoft\Microsoft System Data Protection Manager 2007

手順 5：ワトソン博士のアンインストール

Windows Server 2008 上のワトソン博士をアンインストールするには、コマンドプロンプトで次のいずれかのコマンドを入力します。

- 32 ビットオペレーティングシステムの場合：**msiexec /x {95120000-00B9-0409-0000-0000000FF1CE}**
- 64 ビットオペレーティングシステムの場合：**msiexec /x {95120000-00B9-0409-1000-0000000FF1CE}**

DPM 2007 の構成

System Center Data Protection Manager (DPM) 2007 のインストール後、データの保護を開始する前に一連の構成タスクを実行する必要があります。ここでオプションの DPM 機能を設定することも可能ですが、オプション機能は、DPM の導入後にいつでも設定できます。本項では、DPM 2007 を初めて開く際の手順、および各構成タスク（必須とオプション）を行う手順について説明します。

本項の内容

- DPM の構成の概要
- 必須の構成タスク
- オプションの構成タスク

DPM の構成の概要

System Center Data Protection Manager (DPM) 2007 を構成するには、本項の手順に従って DPM 管理者コンソールを開きます。

DPM 管理者コンソールの概要については、「DPM 2007 における DPM 管理者コンソール」を参照してください。

DPM 管理者コンソールを開くには、次の手順に従います。

1. ローカル Administrators グループのメンバーであるドメインユーザーアカウントの下で、DPM サーバーにログオンします。
2. **スタート**メニューで、**すべてのプログラム**、**Microsoft System Center Data Protection Manager 2007** の順にポイントし、**Microsoft System Center Data Protection Manager 2007** をクリックします。

   または

   使用可能な場合は、デスクトップで **Microsoft System Center Data Protection Manager 2007** のアイコンをダブルクリックします。

関連項目

DPM 2007 における DPM 管理者コンソール

必須の構成タスク

System Center Data Protection Manager (DPM) 2007 を使用してデータの保護を開始する前に、DPM によって保護される各コンピュータが保護されるコンピュータのソフトウェア要件を満たしていることを確認する必要があります。DPM 2007 のソフトウェア要件については、「Software Prerequisites」（ソフトウェアの前提条件）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=100242）を参照してください。

DPM 2007 を使用してデータを保護するには、記憶域プールに少なくとも 1 台のディスクを追加する必要があります。

メモ

カスタムボリュームを使用してデータソースを保護する場合、または、テープベース（D2T）の保護のみを使用する場合は、記憶域プールへのディスクの追加は必須ではありません。

- テープでデータを保護する場合は、テープライブラリとスタンドアロンテープドライブを構成します。
- 保護する各コンピュータに保護エージェントをインストールします。
- Windows SharePoint Services VSS Writer サービス（WSS Writer サービス）を開始して構成し、保護エージェントにファーム管理の資格情報を提供します。

  メモ

  Windows SharePoint Services 3.0 または Microsoft Office SharePoint Server 2007 が実行されているサーバー上でサーバーファームを保護する場合にのみ、このタスクを実行してください。
- 1 つまたは複数の保護グループを作成します。

本項の内容

- 記憶域プールへのディスクの追加
- テープライブラリの構成
- 保護エージェントのインストールと構成
- WSS Writer サービスの開始と構成
- 保護グループの作成

記憶域プールへのディスクの追加

記憶域プールとは、System Center Data Protection Manager (DPM) 2007 サーバーが保護されるデータのレプリカや復旧ポイントを保存するディスクセットのことです。データの保護を開始する前に、少なくとも 1 台のディスクを記憶域プールに追加する必要があります。構成後に、記憶域プールにさらにディスクを追加することも可能です。

メモ

DPM では USB/1394 ディスクはサポートされていません。

ディスクの種類の選択と記憶域プールの必要容量の計算に関する詳細とガイドラインについては、『Planning a DPM 2007 Deployment』（DPM 2007 の導入計画）で「Planning the Storage Pool」（記憶域プールの計画）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=91965）を参照してください。

必要な記憶領域を予測するには、DPM storage calculator（記憶域電卓）をダウンロードしてご利用ください（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=104370）。

DPM 2007 では、記憶域プール専用のディスク 1 台と以下を専用とするディスク 1 台が必要です。

- システムファイル
- DPM インストールファイル
- DPM 前提条件ソフトウェア
- DPM データベースファイル

メモ

カスタムボリュームを使用してデータソースを保護する場合、または、テープペース（D2T）の保護のみを使用する場合は、記憶域プールへのディスクの追加は必須ではありません。

DPM は、オペレーティングシステムがインストールされているのと同じボリュームにインストールできます。または、オペレーティングシステムがインストールされていない別のボリュームにインストールすることも可能です。ただし、DPM をインストールするディスクは、記憶域プールに加えることができません。

注意

DPM は、記憶域プールに追加されたディスク上の既存ボリューム内の領域を使用することができません。記憶域プールのディスク上の既存ボリュームに空き領域があっても、DPM が使用できる領域は、DPM によって作成されるボリューム内の領域に限られます。ディスク領域全体を記憶域プールで使用できるようにするには、ディスク上の既存ボリュームをすべて削除した上で、ディスクを記憶域プールに追加してください。

記憶域プールへのディスクの追加は、次の手順で行います。

1. DPM 管理者コンソールのナビゲーションバーで、**管理** をクリックし、**ディスク** タブをクリックします。
2. **操作**ウィンドウで、**追加** をクリックします。

   記憶域プールへのディスクの追加 ダイアログボックスが表示されます。 **利用可能なディスク** セクションに、記憶域プールに追加できるディスクが一覧表示されます。
3. 1 台または複数のディスクを選択し、**追加** をクリックし、**OK** をクリックします。

関連項目

保護エージェントのインストールに関する問題のトラブルシューティング

テープライブラリの構成

テープライブラリとスタンドアロンのテープドライブを System Center Data Protection Manager (DPM) 2007 に追加して、テープベースの短期および長期のデータ保護を有効にすることができます。テープライブラリとスタンドアロンのテープドライブは、DPM サーバーに物理的に接続されている必要があります。

新しいテープライブラリまたはスタンドアロンのテープドライブを DPM サーバーに取り付けた後で、それらが DPM サーバーに認識されるためには、**再スキャン** 操作を手動で行う必要があります。 **再スキャン** 操作を行うと、DPM サーバーに取り付けられたテープライブラリまたはスタンドアロンのテープドライブが検査され、DPM 管理者コンソール内の **ライブラリ** タブに表示されている情報が更新されます。 **ライブラリ** タブには、スタンドアロンの各テープドライブ、および各テープライブラリとそのドライブが表示されます。

ハードウェアを変更した場合は、**ライブラリ** タブで **再スキャン** 操作を実行して、新しいテープライブラリとスタンドアロンのテープドライブのすべてについて、状態を確認し、表示を更新します。

メモ

DPM 管理者コンソールの**ライブラリ** タブに一覧表示されているスタンドアロンのテープドライブが、スタンドアロンのテープドライブの物理状態と一致しない場合は、『DPM 2007 Operations Guide』（DPM 2007 の操作ガイド）で「Managing Tape Libraries」（テープライブラリの管理）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=91964）を参照してください。たとえば、テープライブラリからのドライブがスタンドアロンのテープドライブとして表示されていたり、スタンドアロンのテープドライブがテープライブラリ内のドライブとして間違って表示されている場合は、テープドライブの情報を再マップする必要があります。

テープライブラリの構成は、次の手順で行います。

1. DPM 管理者コンソールのナビゲーションバーで、**管理** をクリックし、**ライブラリ** タブをクリックします。
2. **操作**ウィンドウで、**再スキャン** をクリックします。

   再スキャン 操作は、完了するまでに数分かかることがあります。ライブラリジョブはすべて、**再スキャン** 操作中に開始されたキューに追加されます。 **再スキャン** 操作の開始時にライブラリジョブがすでに進行中だった場合、**再スキャン** 操作は失敗します。

関連項目

テープライブラリの管理

保護エージェントのインストールと構成

保護エージェントとは、保護されるデータに対する変更を記録し、保護されるコンピュータから System Center Data Protection Manager (DPM) 2007 サーバーに変更を転送するコンピュータにインストールされているソフトウェアのことです。保護エージェントはまた、DPM が保護し、回復できるコンピュータ上のデータを識別します。

データの保護を開始する前に、保護するデータが含まれている各コンピュータに保護エージェントをインストールする必要があります。コンピュータに保護エージェントをインストールすると、そのコンピュータは、DPM 管理者コンソールの **管理** タスク領域に、保護されていないコンピュータとして表示されます。コンピュータ上のデータソースは、保護グループに追加するまで保護されません。保護される各コンピュータは、保護されるコンピュータの前提条件を満たしている必要があります。詳細については、「Protected Computer Prerequisites」（保護されるコンピュータの前提条件）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=100473）を参照してください。

DPM は、フォレスト内のドメインを越えたコンピュータの保護をサポートしています。ただし、ドメイン間に双方向の信頼を確立する必要があります。ドメイン間に双方向の信頼が確立されていない場合は、各ドメインに個別の DPM サーバーが必要です。DPM 2007 はフォレストを越えた保護をサポートしていません。

DPM サーバー上でファイアウォールが有効な場合は、DPM サーバー上でファイアウォールを構成する必要があります。DPM サーバー上でファイアウォールを構成するには、TCP トラフィックに対してポート 135 を開き、ファイアウォール経由で通信できるように DPM サービス（Msdpm.exe）と保護エージェント（Dpmra.exe）を有効にする必要があります。

本項の内容

- DPM サーバー上でのWindows ファイアウォールの構成
- 保護エージェントのインストール
- ファイアウォールの内側への保護エージェントのインストール
- サーバーイメージを使用した保護エージェントのインストール
- 保護エージェントの手動によるインストール

DPM サーバー上でのWindows ファイアウォールの構成

以下の手順は、Windows ファイアウォールの構成に適用されます。DPM のインストール時に DPM サーバー上で Windows ファイアウォールが有効な場合は、DPM セットアップによってファイアウォールが自動的に構成されます。その他のファイアウォールソフトウェアの構成の詳細については、ファイアウォールのマニュアルを参照してください。

DPM サーバー上で Windows ファイアウォールを構成するには、次の手順に従います。

1. コントロールパネルで、**Windows ファイアウォール** をクリックします。
2. **全般**2. タブで、Windows ファイアウォールがオンになっていることと、**例外を許可しない** チェックボックスがオフになっていることを確認します。
3. **例外**タブで、次の手順を行います。
   a. **プログラムの追加** をクリックし、**参照** をクリックし、**<ドライブ文字>:\Program Files\Microsoft DPM\DPM\bin** に移動します。
   b. **Msdpm.exe** を選択し、**開く** をクリックし、**OK** をクリックします。
   c. **例外** タブで、**プログラムの追加** をクリックし、**参照** をクリックし、**<ドライブ文字>:\Program Files\Microsoft DPM\DPM\bin** に移動します。
   d. **Dpmra.exe** を選択し、**開く** をクリックし、**OK** をクリックします。
4. **ポートの追加**をクリックし、**名前** ボックスにポートの名前（任意）を入力し、**ポート番号** ボックスに **135** と入力し、プロトコルに TCP が指定されていることを確認し、**OK** をクリックして、**ポートの追加** ダイアログボックスを閉じます。
5. **OK**をクリックして、**Windows ファイアウォール** ダイアログボックスを閉じます。

メモ

エージェントコーディネータとの通信を有効にするにはポート 5718 を、保護エージェントとの通信を有効にするにはポート 5719 を開く必要があります。

保護エージェントのインストール

保護エージェントのインストールウィザードを使用して、同じドメインのメンバーであるサーバー、および信頼された複数のドメインにまたがるサーバーに保護エージェントをインストールします。

ファイアウォールの内側にあるサーバーに保護エージェントをインストールする必要がある場合は、本項の「ファイアウォールの内側への保護エージェントのインストール」を参照してください。

保護されるコンピュータに保護エージェントをインストールする前に、修正プログラム 940349 を適用する必要があります。この修正プログラムの詳細については、サポート技術情報（KB）940349「Availability of a Volume Shadow Copy Service (VSS) update rollup package for Windows Server 2003 to resolve some VSS snapshot issues」（VSS スナップショットの一部の問題を解決するための Windows Server 2003 用ボリュームシャドウコピーサービス（VSS）更新ロールアップパッケージの可用性）(http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=99034) を参照してください。

メモ

サポート技術情報（KB）940349 をインストールし、DPM サーバーまたは保護されるサーバー、もしくはその両方を再起動したら、DPM 管理コンソール内の保護エージェントをリフレッシュすることをお勧めします。エージェントをリフレッシュするには、**管理** タスク領域で **エージェント** タブをクリックし、コンピュータを選択し、**操作** ウィンドウで **情報の更新** をクリックします。保護エージェントをリフレッシュしないと、エラー ID: 31008 が表示される場合があります。DPM による保護エージェントのリフレッシュは 30 分おきにしか行われないからです。

保護エージェントのインストール中に、ドメインポリシーが原因でネットワーク関連または権限関連の問題が発生する場合は、保護エージェントを手動でインストールすることをお勧めします。保護エージェントの手動によるインストールについては、「保護エージェントの手動によるインストール」を参照してください。

DPM サーバーを指定せずにコンピュータ上のサーバーイメージを使用して保護エージェントをインストールする方法については、「サーバーイメージを使用した保護エージェントのインストール」を参照してください。

サーバーに保護エージェントをインストールするには、次の手順に従います。

1. DPM 管理者コンソールのナビゲーションバーで、**管理** をクリックし、**エージェント** タブをクリックします。
2. **操作**ウィンドウで、**インストール** をクリックします。

   保護エージェントのインストールウィザードが起動し、DPM サーバードメインに使用可能なコンピュータの一覧が表示されます。ウィザードを使用するのが今回初めての場合、DPM は潜在的なコンピュータの一覧を得るために Active Directory を照会します。初回のインストール後に、DPM はデータベースにコンピュータの一覧を表示します。一覧は、自動検出プロセスによって毎日 1 回アップデートされます。

3. **コンピュータの選択**ページで、**コンピュータ名** リストから 1 台または複数のコンピュータ（50 台まで）を選択し、**追加** をクリックし、**次へ** をクリックします。

   保護エージェントをインストールする特定のコンピュータの名前がわかっている場合は、**コンピュータ名** ボックスにコンピュータの名前を入力し、**追加** をクリックすれば、コンピュータを素早く検索し、選択することができます。DPM はコンピュータの Active Directory を照会し、**選択したコンピュータ** リストに追加します。コンピュータ名がわからない場合は、一覧を参照してコンピュータを見つけます。

   信頼されたドメインの外にあるコンピュータを検索するには、保護するコンピュータの完全修飾ドメイン名を入力する必要があります（たとえば、**Computer1.Domain1.corp.microsoft.com**。Computer*1* は保護するターゲットコンピュータの名前、*Domain1.corp.microsoft.com* はターゲットコンピュータが属するドメインです）。

   メモ

   コンピュータの選択 ページの **詳細** ボタンは、コンピュータにインストールできる保護エージェントのバージョンが複数ある場合にのみ有効となります。これが有効な場合は、このオプションを使用して、最新バージョンにアップデートする前にインストールされていた保護エージェントの旧バージョンをインストールできます。

4. **資格情報の入力**ページで、選択されているすべてのサーバー上のローカル Administrators グループのメンバーであるドメインアカウントのユーザー名とパスワードを入力します。

5. **ドメイン**ボックスで、ターゲットコンピュータに保護エージェントをインストールするために使用するユーザーアカウントのドメイン名を受け入れるか、または入力します。このアカウントは、現在のドメインまたは信頼されたドメインに属している可能性があります。

   信頼されたドメインの外にあるコンピュータに保護エージェントをインストールする場合は、現在のドメインユーザーの資格情報を入力します。ユーザー / 管理者は、どの信頼されたドメインのメンバーでもかまいませんが、保護されるターゲットサーバーの管理者でなければなりません。

   サーバークラスタ内のノードを選択した場合、DPM はクラスタ内の追加のノードを検出し、**クラスタノードの選択** ページを表示します。

   - **クラスタノードの選択** ページの**クラスタノードの選択** セクションで、クラスタ内の残りのノードの選択で DPM に使用させるオプションを選択し、**次へ** をクリックします。

6. **再起動の方法の選択**ページで、保護エージェントのインストール後にコンピュータの再起動に使用する方法を選択します。データの保護を開始する前に、コンピュータを再起動する必要があります。この再起動は、DPM がブロックレベルの変更を追跡し、その変更を DPM と保護されるコンピュータの間で転送するために使用するボリュームフィルタをロードするのに必要です。

いいえ、選択されたコンピュータを後で再起動します を選択した場合、再起動が完了した後で、保護されていないサーバー上で保護エージェントのインストール状況が更新されていないなら、**エージェント** タブの **管理** タスク領域で、**情報の更新** をクリックします。

メモ

保護エージェントを DPM サーバーにインストールする場合は、コンピュータの再起動は不要です。

選択したサーバーのいずれかがクラスタサーバーである場合は、**再起動の方法の選択** ページがもう一度表示され、クラスタサーバーの再起動に使用する方法を選択することができます。

クラスタデータを保護するには、サーバークラスタのすべてのノードに保護エージェントをインストールする必要があります。データの保護を開始する前に、サーバーを再起動する必要があります。サービスの開始に要する時間のために、再起動が完了してから DPM がサーバーに接続できる状態になるまでに数分かかる場合があります。

メモ

Microsoft Cluster Server（MSCS）に属するサーバーは DPM によって再起動されません。MSCS クラスタ内のサーバーは、手動で再起動する必要があります。

7. **概要**ページで **インストール** をクリックして、インストールを開始します。
8. **インストール**ページの **タスク** タブに結果が表示され、インストールが成功したかどうかがわかります。 ウィザードがタスクを完了する前に **閉じる** をクリックし、**エージェント** タブの **管理** タスク領域にある DPM 管理者コンソールで、インストールの進行状況を監視できます。

インストールが失敗した場合は、**アラート** タブの **監視** タスク領域でアラートを確認します。

メモ

Windows SharePoint Services ファームを保護するためにバックエンドサーバーに保護エージェントをインストールすると、**エージェント** タブの **管理** タスク領域にサーバーが保護されているものとして表示されません。ただし、Windows SharePoint Services ファームがサーバー上のデータを持っている場合、DPM はバックエンドサーバーを内部で保護します。

ファイアウォールの内側への保護エージェントのインストール

ファイアウォールの内側にあるコンピュータに保護エージェントをインストールする場合、DPM は **DPM2007\Agents\DPMAgentInstaller.exe** という名前の実行可能ファイルを提供します。このファイルにより、次の手順が実行されます。

- 保護エージェントの前提条件と DPM 保護エージェントがインストールされます。
- 指定された DPM サーバー名からコマンドを受け取るようにターゲットコンピュータを構成します。
- 通信の受信を許可するようにファイアウォールを構成します。

メモ

英語以外の言語を使用される方は、**DPM2007\Agents\<言語>\DPMAgentInstaller.exe** からローカライズされたエージェントのインストーラを選択してください。

ファイアウォールの内側にあるサーバーに保護エージェントをインストールするには、次の手順に従います。

1. 保護エージェントをインストールするコンピュータで Windows コマンドプロンプトを開いて、DPM2007\Agents フォルダから **DpmAgentInstaller.exe <DPM サーバー名>** と入力します。

   メモ

   Microsoft Systems Management Server（SMS）を使用して実行可能ファイルを実行することも可能です。

2. DPM サーバーの DPM Management Shell プロンプトで、**Attach-ProductionServer.ps1 <DPM サーバー名> <運用サーバー名> <ユーザー名> <パスワード> <ドメイン>** と入力します。

   パスワードパラメータは必須ではなく、入力しないことをお勧めします。パスワードを入力するダイアログが表示されますが、パスワードは画面に表示されません。ただし、多数のコンピュータに保護エージェントをインストールするためのスクリプトを使用する場合は、パスワードを入力してください。

   メモ

   保護されるコンピュータを別のドメインに接続する場合は、完全修飾ドメイン名を指定する必要があります。たとえば、**Computer1.Domain1.corp.microsoft.com**。Computer*1* は保護されるコンピュータの名前、*Domain1.corp.microsoft.com* はコンピュータを接続するドメインです。

サーバーを保護するために必要な構成が作成されました。これで、保護されるサーバーが DPM 管理者コンソールに表示されます。保護エージェントの正しい状態を表示するには、**監視** タスク領域の **ジョブ** タブで、**ジョブの更新** をクリックします。

サーバーイメージを使用した保護エージェントのインストール

DPMAgentInstaller.exe を使用して DPM サーバーを指定することなく、サーバーイメージを使用して、保護エージェントをインストールすることができます。イメージがコンピュータに適用され、オンラインになったら、**SetDpmServer.exe <DPM サーバー名>** ツールを実行して、構成およびファイアウォールを開く手順を完了します。

サーバーイメージを使用して保護エージェントをインストールするには、次の手順に従います。

1. 保護エージェントをインストールするコンピュータで Windows コマンドプロンプトを開いて、**DpmAgentInstaller.exe** と入力します。
2. サーバーイメージを物理コンピュータに適用し、オンラインにします。
3. コンピュータをドメインに加え、適切な管理者の資格情報を使用してドメインユーザーとしてログオンします。
4. Windows コマンドプロンプトを開いて、<ドライブ文字>:\Program Files\Microsoft Data Protection Manager\bin ディレクトリで **SetDpmServer.exe <dpm サーバー名>** を入力して、構成およびファイアウォールを開く手順を完了します。

   DPM サーバーに完全修飾ドメイン名（FQDN）を指定します。現在のドメインに、またはドメインを越えた複数の一意の名前には、コンピュータ名のみを指定します。

   メモ

   <ドライブ文字>:\Program Files\Microsoft Data Protection Manager\bin から SetDpmServer.exe を実行する必要があります。実行可能ファイルをほかの場所から実行すると、操作が失敗します。
5. DPM サーバーの DPM Management Shell プロンプトで、**Attach-ProductionServer.ps1 <DPM サーバー名> <運用サーバー名> <ユーザー名> <パスワード> <ドメイン>** と入力します。

   パスワードパラメータは必須ではなく、入力しないことをお勧めします。パスワードを入力するダイアログが表示されますが、パスワードは画面に表示されません。ただし、多数のコンピュータに保護エージェントをインストールするためのスクリプトを使用する場合は、パスワードを入力してください。

   メモ

   運用コンピュータを別のドメインに接続する場合は、運用コンピュータの完全修飾ドメイン名を指定する必要があります。

保護エージェントの手動によるインストール

保護エージェントは手動によるインストールが可能です。保護エージェントを手動でインストールするには、次の手順に従ってコマンドラインオプションを使用します。

DPM 保護エージェント用の SMS パッケージを作成するには、SMS 管理者に以下を提供する必要があります。DpmAgentInstaller.exe パッケージと DpmAgentInstaller_AMD64.exe パッケージに対する共有。

- **DpmAgentInstaller.exe** パッケージと **DpmAgentInstaller_AMD64.exe** パッケージに対する共有。
- 保護エージェントをインストールするサーバーの一覧。
- DPM サーバーの名前。

保護エージェントのサイレントインストールを行うには、コマンドプロンプトで **DpmAgentInstaller.exe /q <DPM サーバー名>** と入力します。

保護エージェントを手動でインストールするには、次の手順に従います。

1. 保護エージェントをインストールするコンピュータでコマンドプロンプトを開いて、**DpmAgentInstaller.exe <DPM サーバー名>** と入力します。

   DpmAgentInstaller.exe コマンドの後ろに **/q** パラメータを指定すれば、対話型ではないインストールを行うことができます。 たとえば、**DpmAgentInstaller.exe /q <DPM サーバー名>** と入力します。

2. 適切な DPM サーバー用の保護エージェントとファイアウォールの設定を構成するには、**<ドライブ文字>:\Program Files\Microsoft Data Protection Manager\bin SetDpmServer.exe** と入力します。

   手順 1 で DPM サーバーを指定した場合、この手順は不要です。

3. DPM サーバーの DPM Management Shell プロンプトで、**Attach-ProductionServer.ps1 <DPM サーバー名> <運用サーバー名> <ユーザー名> <パスワード> <ドメイン>** と入力します。

   パスワードパラメータは必須ではなく、入力しないことをお勧めします。パスワードを入力するダイアログが表示されますが、パスワードは画面に表示されません。ただし、多数のサーバーに保護エージェントをインストールするためのスクリプトを使用する場合は、パスワードを入力してください。

メモ

保護されるコンピュータを別のドメインに接続する場合は、完全修飾ドメイン名を指定する必要があります。たとえば、**Computer1.Domain1.corp.microsoft.com**。Computer*1* は保護されるコンピュータの名前、*Domain1.corp.microsoft.com* はコンピュータを接続するドメインです。

運用コンピュータを保護するために必要な構成が作成されました。これで、運用コンピュータが DPM 管理者コンソールに表示されます。

WSS Writer サービスの開始と構成

Windows SharePoint Services 3.0 または Microsoft Office SharePoint Server 2007 を実行しているサーバーでサーバーファームの保護を開始する前に、Windows SharePoint Services VSS Writer サービス（WSS Writer サービス）の開始と構成を行う必要があります。

Windows SharePoint Services Web Front End（WFE）サーバーに保護エージェントをインストールした後で、保護エージェントに Windows SharePoint Services ファームの資格情報を提供する必要があります。

単一の WFE サーバーには、次の手順を行います。Windows SharePoint Services ファームに複数の WFE サーバーがある場合は、新しい保護グループの作成ウィザードで保護を構成する際に WFE サーバーを 1 台だけ選択してください。

WSS Writer サービスの開始と構成は、次の手順で行います。

1. WFE サーバーのコマンドプロンプトで、ディレクトリを <DPM のインストール場所 >\bin\ に変更します。
2. **ConfigureSharepoint.exe**と入力します。
3. 画面の指示に従って、Windows SharePoint Services ファームの管理者の資格情報を入力します。

   Windows SharePoint Services ファームに提供する管理者資格情報は、WFE サーバー上のローカル管理者でなければなりません。

   メモ

   Windows SharePoint Services ファームの管理者パスワードを変更するたびに、**ConfigureSharepoint.exe** を再実行する必要があります。

保護グループの作成

保護グループとは、同じ保護構成を共有するデータソースの集まりです。保護グループ内のデータソースは、保護グループメンバー、または単にメンバーと呼ばれます。

次の表は、System Center Data Protection Manager（DPM）2007 によって保護されるデータソースと、DPM を使用して回復できるデータのレベルを示したものです。

製品	保護可能なデータ	回復が可能なデータ
• Microsoft Exchange Server 2003 With Service Pack 2（SP2） • Exchange Server 2007	• ストレージグループ	• ストレージグループ • データベース • メールボックス
• Microsoft SQL Server 2000 With Service Pack 4（SP4） • SQL Server 2005 With Service Pack 1（SP1）以降	• データベース	• データベース
• Microsoft Office SharePoint Server 2007 • Microsoft Windows SharePoint Services 3.0	• ファーム	• ファーム • データベース • サイト • ファイルまたはリスト
• Windows Server 2003 With SP1 • Windows Storage Server 2003 With SP1	• ボリューム • 共有 • フォルダ	• ボリューム • 共有 • フォルダ • ファイルデータ
• Microsoft Virtual Server 2005 R2 SP1	• 仮想サーバーホストの構成 • 仮想コンピュータ • 仮想コンピュータで実行されているアプリケーションのデータ	• 仮想サーバーホストの構成 • 仮想コンピュータ • 仮想コンピュータで実行されているアプリケーションのデータ
• Windows XP Professional SP2 が実行されているワークステーション • Windows Vista Home Premium オペレーティングシステムを除く Windows Vista オペレーティングシステム（Windows Vista が実行されているコンピュータは、ドメインのメンバーである必要があります） **メモ** DPM では、Windows XP Professional SP2 および Windows Vista オペレーティングシステムが実行されているノートブックコンピュータのファイル保護はサポートされません。	• ボリューム • 共有 • フォルダ • ファイルデータ	• ボリューム • 共有 • フォルダ • ファイルデータ

データの保護を開始する前に、保護グループを少なくとも 1 つは作成する必要があります。保護グループのガイドラインについては、『Planning a DPM 2007 Deployment』（DPM 2007 の導入計画）で「Planning Protection Groups」（保護グループの計画）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=91849）を参照してください。

新しい保護グループの作成ウィザードの指示に従って保護グループを作成することができます。保護グループの作成プロセスで、グループをどう構成するかについて一連の決定を下すことになります。

保護グループの作成プロセスの全体を通じて、ウィザードには既定のオプションが示されますが、別のオプションを選択することも可能です。

本項の内容

- 新しい保護グループの作成ウィザードの起動
- 保護グループのメンバーの選択
- Exchange 保護オプションの指定
- 保護グループの名前と保護方法の選択
- 短期保護目標の設定
- テープベースの短期回復目標の設定
- 保護グループへのスペースの割り当て
- 長期保護目標の設定
- ライブラリとテープの詳細の選択
- レプリカの作成方法の選択
- パフォーマンスの最適化
- 保護グループの作成

新しい保護グループの作成ウィザードの起動

新しい保護グループの作成ウィザードを起動し、指示に従って保護グループを作成します。新しい保護グループの作成ウィザードを起動するには、DPM 管理者コンソールを開く必要があります。

DPM 管理者コンソールを使用するには、DPM サーバーに対する管理者特権のあるアカウントを使用して、その DPM サーバーにログオンする必要があります。

メモ

DPM では、複数ユーザーがリモートターミナルサーバーのセッションを使用して DPM 管理者コンソールにアクセスする操作がサポートされています。

DPM 管理者コンソールをローカルで開くには、次の手順に従います。

- **スタート** メニューで、**すべてのプログラム**、**Microsoft System Center Data Protection Manager 2007** の順にポイントし、**Microsoft System Center Data Protection Manager 2007** をクリックします。

  または

- デスクトップで **Microsoft System Center Data Protection Manager 2007** のアイコンをダブルクリックします。

新しい保護グループの作成ウィザードを起動する手順は、次のとおりです。

1. DPM 管理者コンソールで、ナビゲーションバーの **保護** をクリックします。
2. **操作**ウィンドウで、**保護グループの作成** をクリックします。

   新しい保護グループの作成ウィザードが表示されます。
3. **ようこそ**ページを読み、**次へ** をクリックします。

メモ

次回から保護グループの作成時にウィザードの **ようこそ** ページが表示されないようにするには、**次回からこのページをスキップする** を選択します。

保護グループのメンバーの選択

保護するデータソースを選択するには、**グループのメンバーを選択する** ページを使用します。

DPM によって保護されるメンバーが含まれているコンピュータは、保護されるコンピュータの要件を満たす必要があります。保護されるコンピュータのソフトウェア前提条件については、「Protected Computer Prerequisites」（保護されるコンピュータの前提条件）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=91851）を参照してください。

DPM によって保護されないファイルの種類があり、その場合は、データがサポートされていないことを示す警告が表示されます。DPM によってサポートされていないファイルの種類の一覧を表示する方法の詳細については、DPM 2007 のヘルプで、「How to display warnings for unsupported data」（サポートされていないデータを示す警告の表示方法）を参照してください。

DPM では、ファイルシステムやアプリケーションパス内の再解析ポイントは保護されません。この保護グループ内でボリューム、フォルダ、またはアプリケーションを選択すると、DPM は再解析ポイントを除くすべてのデータを保護します。保護されないデータの種類の詳細については、「Planning a DPM 2007 Deployment」（DPM 2007 の導入計画）で「Planning Protection Groups」（保護グループの計画）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=91849）を参照してください。

保護するデータの選択は、次の手順で行います。

1. **グループのメンバーを選択する**ページで、保護するデータを保存するすべてのコンピュータが**使用できるメンバー** ボックスに表示されていることを確認します。
2. **使用できるメンバー**ボックスで、サーバーノードを展開して、各サーバー上で使用できるデータソースを表示します。

   メモ

   保護エージェントをインストールした直後の場合、サーバーのノードを展開して使用できるデータソースが表示されるまでに数分かかることがあります。
3. 保護グループに含める各データソースの隣にあるボックスにチェックマークを入れます。データソースを選択すると、選択項目が **選択したメンバー** ボックスに表示されます。

   保護グループに含める各データソースについて、次の点に注意してください。

   - 他の保護グループのメンバーであるデータソースと、別の保護グループによってすでに保護されているボリューム上にある保護されていないデータソースは、表示されますが選択できません。
   - ファイルサーバーデータの場合、同じファイルサーバーボリュームからのデータソースを異なる保護グループに含めることはできません。
   - システムボリュームに保護するユーザーデータが含まれている場合は、システムボリューム全体を保護するのではなく、必要なフォルダや共有を個別に保護することをお勧めします。
   - SQL Server 2005 のデータベーススナップショットを含めることはできません。データベーススナップショットは選択可能な通常のデータベースとして表示されますが、DPM では、回復に備えてデータベーススナップショットを保護することはできません。データベーススナップショットは、Database Snapshots フォルダ内の Microsoft SQL Server Management Studio に表示できます。
   - Windows SharePoint Services のデータベースを SQL サーバーのデータソースとして保護することはできません。同データベースは、 Windows SharePoint Services 保護の一部として含める必要があります。
   - クラスタリソースを保護するには、リソースグループ名を展開して、保護するクラスタリソースを選択します。
   - スタンドアロンテープが 1 本しかない場合は、テープを変更する手間を最小限に抑えるために、保護グループを 1 つだけにしてください。複数の保護グループを使用すると、各保護グループに対して別々のテープが必要です。
   - 除外されたフォルダの一覧を表示するには、**除外されたフォルダ** の隣にある **表示** リンクをクリックします。フォルダを除外するには、ディレクトリ構造を展開し、除外するフォルダのチェックボックスをクリアします。
   - ファイルの種類を除外するには、**除外するファイル** リンクをクリックし、**除外ファイルの種類** ダイアログボックスで除外するファイルの種類を入力し、**OK** をクリックします。
4. 保護グループのメンバーを選択したら、**次へ** をクリックします。

Exchange 保護オプションの指定

保護する Exchange Server データソースを選択したら、**Exchange 保護オプションの指定** ページが表示されます。このページを使用して、Exchange Server データベースの整合性をチェックするかどうかを指定し、保護するクラスタノードを選択します。

Exchange 保護オプションの指定は、次の手順で行います。

1. **Exchange 保護オプションの指定**ページで、**Eseutil を実行してデータの整合性をチェックする** チェックボックスを選択して、Exchange Server データベースの整合性をチェックします。

   テープベースの保護を行うには、保護されるサーバーに Exchange Server データベースユーティリティ（Eseutil.exe）をインストールする必要があります。ディスクベースの保護を行うには、Eseutil.exe を DPM サーバーにインストールする必要があります。Eseutil.exe の詳細については、「Eseutil」（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=83451）を参照してください。
2. クラスタ連続レプリケーション（CCR）Exchange Server 用に保護するノードの種類を選択します。
   - **アクティブノードを保護する。**DPM によって保護するノードとしてアクティブノードを選択する場合は、このオプションを選択します。
   - **パッシブノードを保護する**。DPM によって保護するノードとしてアクティブノードを選択する場合は、このオプションを選択します。
   - **指定したノードのみを保護する**。DPM によって保護するノードを指定するには、このオプションを選択し、ドロップダウンリストから保護ノードを選択します。
3. **次へ**をクリックします。

保護グループの名前と保護方法の選択

保護するデータを選択した後で、保護方法を選択します。ディスクかテープを使用する短期保護、またはテープのみを使用する長期保護を選択できます。

名前と保護方法を選択するには、次の手順に従います。

1. **データ保護方法の選択**ページの **保護グループ名** ボックスで、保護グループの既定の名前を受け入れるか、または新しい名前を入力します。

   メモ

   保護グループ名には # ? @ \ $ () {} [] などの特殊文字が使用できます。name.ただし、5 つの特殊文字 & < > ‘ “ は使用できません。

2. **保護ポリシー**セクションで、保護方法を選択します。
   - **を使用して短期保護を行います**。短期保護にはこのチェックボックスを選択し、ドロップダウンリストから使用するメディアを選択します。

     メモ

     DPM サーバーにテープライブラリが接続されていない場合、短期保護に使用できるのは **ディスク** のみです。
   - **テープを使用して長期保護を行います**。長期保護には、このチェックボックスを選択します。

   短期保護と長期保護の両方にテープを使用する場合は、DPM は最新の短期テープ完全バックアップのコピーを作成して、長期テープバックアップを生成します。したがって、短期保護の完全バックアップが長期保護の 1 日前に実行されるようにスケジュールすることをお勧めします。そうしておけば、長期テープバックアップに、DPM が前日に作成した短期テープバックアップを利用することができます。短期テープバックアップの前に長期テープバックアップが実行されるようにスケジュールすると、長期バックアップに最新の短期完全バックアップが活用されません。
3. **次へ**をクリックします。

短期保護目標の設定

DPM は、短期回復の目標を使用して保護計画を生成します。ユーザー / 管理者は、データの保存期間を選択し、データの同期が実行される頻度を指定し、選択した復旧ポイントの作成スケジュールを設定することで、短期回復の目標を定義します。復旧ポイントとは、DPM サーバーによって保護されるデータソースのスナップショットまたは時間指定コピーのことです。

保存期間とは、回復のためにデータを使用可能にしておく期間のことです。DPM は、保存期間に指定された期間、復旧ポイントを保持します。レプリカが一貫しない日は保存期間に含まれません。レプリカが一貫しないために DPM 保護が一時的に停止した場合、DPM は保護が再開されるまで、期限切れの復旧ポイントを削除しません。

短期保護目標の設定は、次の手順で行います。

1. **短期保護ポリシーの設定**ページの **保存期間** ボックスで、データを回復可能にしておく期間を選択します。

   短期のディスクベースの保護の場合、保存期間は 1 ～ 64 日の間に設定できます。
2. **同期の頻度**セクションで、次のいずれかを行います。
   - **ごと** を選択し、DPM サーバー上のレプリカを保護されているサーバー上の変更と同期する頻度を選択します。アプリケーションデータの保護に関しては、同期の頻度によって復旧ポイントのスケジュールも決まります。同期の頻度は、15 分間隔から 24 時間間隔まで自由に選択できます。

既定の動作は 15 分ごとです。この場合、DPM サーバーは保護されるコンピュータよりも 15 分以上遅れることはありません。復旧ポイントの目標（RPO）の平均は、コンピュータまたはディスクに致命的な影響を与えるどんなイベントからも 15 分です。

- スケジュールされた復旧ポイントの直前にデータの同期を行うには、**復旧ポイントの直前** を選択します。

  このオプションを選択すると、すべての保護グループメンバーの復旧ポイントは、ユーザー / 管理者が設定するスケジュールに従って作成されます。このオプションを選択すると、同期実行中のネットワークトラフィックは潜在的に増えます。

  同期の詳細については、『DPM 2007 Operations Guide』（DPM 2007 の操作ガイド）で、「Managing Performance」（パフォーマンスの管理）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=91859）を参照してください。

3. 復旧ポイントの指定は、次の手順で行います。
   - **ファイルの復旧ポイント**。 **変更** をクリックして、ファイルデータの復旧ポイントスケジュールを変更します。ユーザー / 管理者が設定するスケジュールに従って、ファイルの復旧ポイントが作成されます。
   - **アプリケーションの復旧ポイント**。毎回の同期後にクリックして、アプリケーションデータの復旧ポイントを作成します。単純復旧モデルを使用する SQL Server データベースなどのように、増分バックアップをサポートしないアプリケーションのデータ保護の場合は、高速完全バックアップのスケジュールによって復旧ポイントのスケジュールが決まります。
   - **高速完全バックアップ**。 **変更** をクリックして高速完全バックアップのスケジュールを変更します。回復時間を短縮できるように、DPM は定期的に高速完全バックアップを実行します。これは、変更されたブロックが含まれるようにレプリカをアップデートする同期の種類です。

     メモ

     高速完全バックアップを頻繁に行うと、保護されるサーバーのパフォーマンスが影響を受ける場合があります。完全バックアップの詳細については、『DPM 2007 Operations Guide』（DPM 2007 の操作ガイド）で、「Managing Performance」（パフォーマンスの管理）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=91859）を参照してください。

   DPM は、保護グループの各ファイルメンバーに対して最大 64 の復旧ポイントを保存できます。アプリケーションデータソースの場合、DPM は最大 448 の高速完全バックアップを、そして、各高速完全バックアップにつき最大 96 の増分バックアップを保存できます。エンドユーザー回復をサポートするために、ファイルの復旧ポイントはボリュームシャドウコピーサービス（VSS）によって 64 までに制限されています。
4. **復旧ポイントの変更**画面で、復旧ポイントを作成する 1 日の回数と曜日を指定し、**OK** をクリックします。
5. **短期目標の設定**ページで、**次へ** をクリックします。

テープベースの短期回復目標の設定

テープを使用して短期保護を行う場合は、テープベースの短期回復目標を設定する必要があります。回復の目標は、保存期間、同期の頻度、復旧ポイントのスケジュールを設定することで定義されます。DPM には回復の目標の既定値がありますが、設定は一部またはすべてを変更できます。

テープベースの短期回復目標は、次の手順で設定します。

1. **保存期間**ボックスで、バックアップデータを使用可能にしておくことが必要な期間を入力または選択します。短期のテープベースの保護の場合、保存期間は 1 ～ 12 週の間に設定できます。
2. **バックアップの頻度**ボックスで、データをバックアップする頻度を選択します。バックアップ頻度は、保存期間に応じて、毎日、毎週、または隔週を選択できます。
3. **バックアップモード**ボックスで、バックアップの種類を選択します。テープベースのバックアップの場合は、復旧ポイントの代わりに、バックアップの種類を次のように設定します。
   - **完全 / 増分バックアップ** （バックアップの頻度で毎日を選択した場合にのみ使用可能）。

     重要

     このバックアップの種類を選択した場合、完全バックアップと増分バックアップの依存関係のために、保存期間は、ユーザー / 管理者の指定よりも最長で 1 週間長くなります。
   - **完全バックアップのみ**。完全 / 増分バックアップ詳細については、「DPM Planning Guide」（DPM プラニングガイド）で、「Planning Protection Groups」（保護グループの計画）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=91849）を参照してください。
4. 毎日バックアップのスケジュールを次のように指定します。
   - **完全バックアップがオン**。毎日の完全バックアップを選択する場合は、時刻を指定します。毎週または隔週を選択すると、使用できるのは完全バックアップのみです。曜日と時刻を指定します。
   - **増分バックアップがオン** （毎日の完全バックアップと増分バックアップを選択した場合にのみ使用可能）。完全バックアップと増分バックアップの曜日と時刻を指定します。
5. 次のパフォーマンスオプションから選択します。
   - テープ上でのデータ圧縮を有効にするには、**データの圧縮** を選択します。
   - テープに書き込む前にデータを暗号化するには、**データの暗号化** を選択します。
   - データの圧縮も暗号化も行わない場合は、**データの圧縮も暗号化も行わない** を選択します。
6. **次へ**をクリックします。

保護グループへのスペースの割り当て

ディスクベースの保護を選択する場合、DPM によって保護する各データソースのレプリカと復旧ポイント用に、記憶域プール上の容量を割り当てる必要があります。また、保護されるファイルサーバーまたはワークステーション上の領域を変更ジャーナル用に割り当てる必要があります。DPM は保護するデータのサイズに基づいて、保護グループのディスクスペースを推奨し、割り当てます。記憶域プール内のディスクスペースは変更できますが、割り当てられたディスクスペースを増やす場合に守るべきガイドラインがあります。ディスクスペースの割り当てに関する詳細なガイドラインについては、「DPM Planning Guide」（DPM プラニングガイド）で、「Planning Protection Groups」（保護グループの計画）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=91849）を参照してください。

保護グループへのスペースの割り当ては、次の手順で行います。

1. **ディスクの割り当ての確認**ページで、保護グループに対して推奨されているスペースの割り当てを確認します。選択されたデータのサイズに基づいて、保護グループに割り当てられるディスクスペースが一覧表示されます。

   ニーズに合わないことがはっきりしている場合以外は、既定のスペースの割り当てをそのまま使用します。

2. **ディスクの割り当ての確認**ページで、以下の手順を行います。

   a. 推奨されている割り当てを受け入れます。あるいは、DPM サーバーと保護されるコンピュータ上のディスクスペースの割り当てを変更するか、またはカスタムボリュームを指定するには、**変更** をクリックします。

   b. **ディスク割り当ての変更** ページの **DPM サーバー** タブで、以下について選択します。

   - **記憶領域の種類**。記憶域の場所を選択します。オプションは、**記憶域プール** または **カスタムボリューム** です。
   - **レプリカボリューム**。レプリカボリューム用のディスクスペースを入力します。または、レプリカボリュームに使用するカスタムボリュームを選択します。
   - **復旧ポイントボリューム**。復旧ポイントボリューム用のディスクスペースを入力します。または、復旧ポイントボリュームに使用するカスタムボリュームを選択します。
   - **カスタムボリューム**。カスタムボリュームを選択します。

     DPM サーバーに接続されているどのボリュームでも（ただし、システムファイルとプログラムファイルが入っているボリュームを除く）、カスタムボリュームとして選択できます。

メモ

DPM は、カスタムボリューム内の領域を管理できません。カスタムレプリカボリュームまたは復旧ポイントボリュームの空き領域が少なくなっているというアラートが表示されたら、ディスクの管理を使用してカスタムボリュームのサイズを手動で変更する必要があります。

- **計算**。データソースのデータサイズを計算するには、このリンクをクリックします。

3. 新しい割り当ての指定を完了する場合は、**OK** をクリックし、**次へ** をクリックします。

長期保護目標の設定

DPM は、長期回復の目標を使用して保護計画を作成します。データの保存期間と長期バックアップのスケジュールを選択することで、長期保護計画を定義します。

保護グループの作成日と同じ日に長期バックアップのスケジュールを設定すると、テープバックアップは次のカレンダーサイクルで実行されます。たとえば、2007 年 1 月 1 日に保護グループを作成し、毎年のテープバックアップのスケジュールを同じ日に設定すると、テープバックアップは 2008 年 1 月 1 日まで実行されません。

保護グループを作成し、テープバックアップを同じ日に実行するには、**保護** タスク領域の **操作** ウィンドウで、**復旧ポイントの作成 - テープ** をクリックします。

長期保護を使用しない場合は、レプリカの作成方法の選択 に進みます。

長期保護ポリシーの設定は、次の手順で行います。

1. **長期保護の設定**ページの **保存期間** ボックスで、バックアップデータを使用可能にしておく期間を入力または選択します。保存期間は 1 ～ 99 年の間に設定できます。
2. **バックアップの頻度**ボックスで、バックアップの頻度を選択します。バックアップの頻度は、次の一覧に示すように指定した保存期間に応じて異なります。
   - 保存期間が 1 ～ 99 年の場合、バックアップの頻度は、毎日、毎週、隔週、毎月、年 4 回、毎年のいずれかを選択できます。
   - 保存期間が 1 ～ 11 か月の場合、バックアップの頻度は、毎日、毎週、隔週、毎月のいずれかを選択できます。
   - 保存期間が 1 ～ 4 週間の場合、バックアップの頻度は、毎日または毎週を選択できます。

   メモ

   スタンドアロンのテープドライブでは、1 つの保護グループに対して、DPM はテープのスペースが足りなくなるまで毎日のバックアップに同じテープを使用します。複数の保護グループに対応するには、別々のテープが必要です。したがって、バックアップにスタンドアロンのテープドライブを使用する場合は、作成する保護グループの数を最小限に留めることをお勧めします。

3. **既定値に戻す**をクリックして、既定値を 3 か月の保存期間に、バックアップの頻度を毎週に戻します。
4. **保護の目標**セクションで、**カスタマイズ** をクリックし、回復の目標に合わせてテープラベルを変更し、バックアップジョブのスケジュールをカスタマイズします。既定のスケジュールがこのスケジュールに置き換えられます。
5. 長期バックアップスケジュールを変更するには、**変更** をクリックします。保存期間とバックアップの頻度に応じて、長期保護のスケジュール設定にはさまざまなオプションがあります。詳細については、次項「長期バックアップスケジュールの変更」を参照してください。長期バックアップスケジュールを変更しない場合は、**次へ** をクリックします。

長期バックアップスケジュールの変更

長期スケジュールの変更 画面で、長期バックアップスケジュールを変更できます。選択した保存期間に応じて変更できるバックアップの頻度とスケジュールを、次の表に一覧表示します。長期バックアップスケジュールを変更した後で **OK** をクリックし、**次へ** をクリックします。

このバックアップ頻度用	保存期間に応じて、次の設定が可能です。
毎日	• 毎日バックアップの時刻 • 毎月バックアップの曜日および時刻 • 毎年バックアップの日付および時刻
毎週	• 毎週バックアップの時刻および曜日 • 毎月バックアップの曜日および時刻 • 毎年バックアップの日付および時刻
隔週	• 隔週バックアップの時刻および曜日 • 毎月バックアップの曜日および時刻 • 毎年バックアップの日付および時刻
毎月	• 毎月バックアップの曜日および時刻 • 毎年バックアップの日付および時刻
年 4 回	• 年 4 回のバックアップの日時（年 4 回のバックアップは、1、4、7、10 月の指定日に実行されます） • 毎年バックアップの日付および時刻
年 2 回	• 年 2 回のバックアップの時刻、日付、および月 • 毎年バックアップの日付および時刻
毎年	• 毎年バックアップの日付および時刻

ライブラリとテープの詳細の選択

テープによる保護を選択した場合は、DPM が生成する各テープのコピー数と、バックアップテープの構成オプションを指定する必要があります。また、データの暗号化と圧縮を行うかどうか、バックアップデータの整合性をチェックするかどうかを指定します。

長期保護を使用しない場合は、レプリカの作成方法の選択 に進みます。

テープとライブラリの詳細を選択するには、次の手順に従います。

1. **ライブラリとテープの詳細の選択**ページの **プライマリライブラリ** セクションで、次の手順を実行します。
   - **ライブラリ** ボックスで、テープバックアップに使用するライブラリを選択します。
   - **割り当てるドライブ** ボックスで、テープバックアップに割り当てるドライブ数を選択します。
2. **コピーライブラリ**セクションで、複数のバックアップコピーに使用するライブラリを選択します。

   メモ

   コピーライブラリ は、複数のテープバックアップコピーを指定した場合にのみ使用してください。複数のコピーを指定しなかった場合は、既定のライブラリ（プライマリ **ライブラリ** と同じ）をそのまま使用します。
3. **長期保護用のテープオプション**セクションで、次の手順を実行します。
   - バックアップコピーのバージョン間のデータの整合性をチェックするには、**バックアップデータの整合性のチェック** を選択します。
   - テープ上でデータ圧縮を有効にするには、**データの圧縮** オプションを選択します。そうすると、テープのスペースが少なくて済み、同じテープに保存できるバックアップジョブの数が増えます。
   - テープに書き込む前にデータを暗号化するには、**データの暗号化** オプションを選択します。そうすると、アーカイブされたデータのセキュリティが強化されます。
   - データの圧縮も暗号化も行わない場合は、**データの圧縮も暗号化も行わない** オプションを選択します。
4. **次へ**をクリックします。

レプリカの作成方法の選択

保護グループを作成する際には、グループに含まれるボリュームのレプリカを作成する方法を選択する必要があります。レプリカの作成には、保護の対象として選択したすべてのデータを DPM サーバーにコピーし、各レプリカに対して整合性チェックと共に同期を実行するという手順があります。

DPM はネットワークを介してレプリカを自動的に作成することができます。または、テープなどのリムーバブルメディアからデータを復元して、レプリカを手動で作成することもできます。レプリカは自動作成の方が簡単ですが、保護されるデータのサイズとネットワークの速度によっては、手動で作成した方が早い場合もあります。

レプリカの作成方法の選択 ページで、データをいつレプリケートするかを選択します。

レプリカの作成方法を選択するには、次の手順に従います。

1. **自動**オプションを選択して、ネットワーク経由でデータをレプリケートします。大きなレプリカを作成するジョブでは、ネットワークトラフィックが少ないときにのみジョブが実行されるようにスケジュールできます。
   - 保護するコンピュータから DPM サーバーへのデータのコピーを直ちに開始するには、**今すぐ** を選択します。
   - 初期コピーを後で（おそらく営業時間後に）スケジュールするには、**後で** を選択します。
   - テープ、USB 記憶装置、またはその他のポータブルメディアを使用してベースラインデータを DPM サーバーに転送するには、**手動** を選択します。

     低速 WAN 接続を経由して初めて大量のデータを同期する場合は、このオプションをお勧めします。レプリカの手動作成の詳細については、『DPM 2007 Operations Guide』（DPM 2007 の操作ガイド）で、「Managing Performance」（パフォーマンスの管理）の「Creating Replicas Manually」（手動によるレプリカの作成）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=91859）を参照してください。

     手動によるレプリカの作成を選択する場合は、ソース（保護されるサーバー）とレプリカパス（DPM サーバー）の詳細を知っておく必要があります。保護するデータについて、タイムスタンプやセキュリティのアクセス許可など、同じディレクトリ構造とプロパティを保持することが重要です。
2. **次へ**をクリックします。

パフォーマンスの最適化

DPM 2007 には、保護の負荷を修正してパフォーマンスを最適化するために複数の方法が用意されています。保護グループのパフォーマンスを最適化するには、**概要** ページで **パフォーマンスの最適化** リンクをクリックして、**パフォーマンスの最適化** ダイアログボックスを開きます。

パフォーマンスの最適化は、次の手順で行います。

1. **概要**ページで、**パフォーマンスの最適化** をクリックします。
2. **パフォーマンスの最適化**ダイアログ ボックスの **ネットワーク** タブで、**送信中の圧縮を有効にする** を選択して、データ転送のサイズを縮小し、DPM サーバー上と保護されるサーバー上の CPU 使用率を高めます。
3. **保護ジョブの開始**ボックスで、（パフォーマンスの低下を避けるために）複数の保護グループの間で同期ジョブの負荷バランスをとる操作が保護ジョブによって開始される時刻を選択します。
4. **整合性チェック**タブで、**毎日の整合性チェックをスケジュールする** を選択し、DPM が保護されるサーバーの通常業務での使用の妨げにならないように、整合性チェックの開始時刻と最長持続時間を選択します。
5. **OK**をクリックします。

保護グループの作成

保護グループを作成する前に、DPM によって実行されるようにセットしたタスクを確認します。タスクは、ウィザードに従って手順を行う際に指定したオプションに基づいています。

保護グループのパフォーマンスを最適化するには、**概要** ページで **パフォーマンスの最適化** リンクをクリックして、**パフォーマンスの最適化** ダイアログボックスを開きます。

保護グループの作成は、次の手順で行います。

1. **概要**ページで、DPM によって実行されるようにセットしたタスクを確認して保護グループを作成し、**グループの作成** をクリックします。

   作成プロセスが完了すると確認ページが表示され、保護グループの作成タスクの結果が示されます。
2. **確認ページ**で、**閉じる** をクリックします。

オプションの構成タスク

System Center Data Protection Manager（DPM）2007 のオプション機能は、初期構成中に有効にできますが、DPM 2007 の導入後にいつでも有効にできます。本項では、構成可能なオプション機能について説明します。

本項の内容

- エンドユーザー回復の有効化
- シャドウコピークライアントソフトウェアのインストール
- アラート通知のサブスクライブ
- SMTP サーバーの構成
- DPM アラートの発行
- DPM 管理シェルのインストール

エンドユーザー回復の有効化

エンドユーザー回復を有効にすると、ユーザーはファイルのシャドウコピーを取得することで個別にファイルデータを回復できます。エンドユーザー回復を有効にするには、次の手順を行う必要があります。

1. エンドユーザー回復をサポートするように Active Directory ドメインサービス（AD DS）を構成します。
2. DPM サーバー上のエンドユーザー回復機能を有効にします。
3. シャドウコピークライアントソフトウェアをクライアントコンピュータにインストールします。

シャドウコピークライアントソフトウェアのインストールの詳細については、「シャドウコピークライアントソフトウェアのインストール」を参照してください。

メモ

Windows Vista が実行されているコンピュータ上では、エンドユーザー回復を有効にするためにシャドウコピークライアントソフトウェアをダウンロードする必要はありません。

保護されるコンピュータ上で DPM エンドユーザー回復または共有フォルダのシャドウコピークライアントソフトウェアを使用できますが、DPM エンドユーザー回復を使用する場合は、保護されるコンピュータ上で共有フォルダのシャドウコピーを無効にする必要があります。保護されるコンピュータ上で共有フォルダのシャドウコピーが有効な場合、エンドユーザー回復のクライアントは、DPM サーバー上にあるシャドウコピーではなく、保護されるコンピュータ上にあるシャドウコピーを表示します。保護を構成したら、DPM サーバー上に十分な復旧ポイントが作成されるよう、エンドユーザー回復を有効にするまで約 1 週間待つことをお勧めします。

次の手順に従って、Active Directory ドメインサービスを構成し、Microsoft System Center Data Protection Manager（DPM）2007 サーバー上でエンドユーザー回復を有効にすることができます。

手順

スキーマとドメインの管理者に対して Active Directory ドメインサービスを構成し、エンドユーザー回復を有効にするには、次の手順に従います。

1. DPM 管理者コンソールの **操作** メニューで、**オプション** をクリックします。
2. **オプション**ダイアログボックスの **エンドユーザー回復** タブで、**Active Directory の構成** をクリックします。
3. **Active Directory の構成**ダイアログボックスで、**現在の資格情報を使用する** を選択するか、または、スキーマとドメイン管理者の両方の権限を持つアカウントのユーザー名とパスワードを入力し、**OK** をクリックします。
4. 確認と通知の両方のプロンプトで **はい** をクリックし、**OK** をクリックします。
5. Active Directory ドメインサービスの構成が完了したら、**エンドユーザー回復を有効にする** オプションのチェックボックスを選択し、**OK** をクリックします。

スキーマとドメインの管理者ではないユーザーに対して Active Directory を構成し、エンドユーザー回復を有効にするには、次の手順に従います。

1. DPM サーバーと同じドメインのメンバーである Windows Server 2003 ベースのコンピュータ上で **<ドライブ>:\Program Files\Microsoft DPM\DPM\End User Recovery\DPMADSchemaExtension.exe** を実行することにより、スキーマとドメインの両方の管理者であるユーザーが Active Directory スキーマを構成するように仕向けます。

   メモ

   保護されるコンピュータと DPM が別のドメインにある場合は、DPMADSchemaExtension.exe ツールを他方のドメインで実行することで、スキーマを展開する必要があります。

2. **Data Protection Manager コンピュータ名を入力してください**ダイアログボックスに、Active Directory ドメインサービス内のエンドユーザー回復データを必要とするコンピュータの名前を入力し、**OK** をクリックします。
3. Active Directory ドメインサービス内のエンドユーザー回復データを必要とする DPM コンピュータの DNS ドメイン名を入力し、**OK** をクリックします。
4. **Data Protection Manager の Active Directory 構成** ダイアログボックスで、**OK** をクリックします。
5. DPM 管理者コンソールの **操作** メニューで、**オプション** をクリックします。
6. **オプション**ダイアログボックスの **エンドユーザー回復** タブで、**エンドユーザー回復を有効にする** チェックボックスを選択し、**OK** をクリックします。

関連項目

オプションの構成タスク

シャドウコピークライアントソフトウェアのインストール

エンドユーザーは、各自のファイルの旧バージョンを個別に回復する前に、DPM シャドウコピークライアントソフトウェアを自らのコンピュータにインストールする必要があります。共有フォルダのシャドウコピーのクライアントがコンピュータ上に存在する場合は、Microsoft System Center Data Protection Manager（DPM）2007 をサポートするようにクライアントソフトウェアを更新する必要があります。

シャドウコピークライアントソフトウェアは、SP2 以降が適用された Windows XP、および Windows Server 2003（SP2 が適用されているか否かは問わない）が実行されているコンピュータにインストールできます。

メモ

Windows Vista が実行されているコンピュータ上では、エンドユーザー回復を有効にするためにシャドウコピークライアントソフトウェアをダウンロードする必要はありません。

次の表は、シャドウコピークライアントソフトウェアのダウンロードサイトをサポートされているオペレーティングシステムごとに示したものです。

オペレーティングシステム	シャドウコピークライアントソフトウェアの場所
Windows XP SP2	http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=46064
Windows XP SP2 の 64 ビットバージョン	http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=50683
Windows Server 2003	http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=46065
Windows Server 2003 SP2	http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=46067
Windows Server 2003 SP2 の 64 ビットバージョン	http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=46068

通常のソフトウェア配布方法（たとえば、グループポリシーソフトウェアのインストール、Microsoft Systems Management Server、または共有フォルダ）を使用して、ユーザーのワークステーションにクライアントソフトウェアをインストールします。ユーザーが各自のワークステーションにクライアントソフトウェアをインストールする場合は、セットアッププログラムを各自のコンピュータの任意の場所にコピーし、ファイル名またはアイコンをダブルクリックし、ウィザードの指示に従うように教えます。

関連項目

オプションの構成タスク

アラート通知のサブスクライブ

重大なアラート、警告、または情報のみのアラート、およびインスタンス化された回復のステータスを電子メールで通知するように System Center Data Protection Manager（DPM）2007 を構成することができます。

メモ

通知をサブスクライブする前に、DPM が通知の送信に使用する SMTP（簡易メール転送プロトコル）サーバーを構成する必要があります。手順については、「SMTP サーバーの構成」を参照してください。

通知のサブスクライブは次の手順で行います。

1. DPM 管理者コンソールの **操作** メニューで、**オプション** をクリックします。
2. **オプション**ダイアログボックスの **通知** タブ で、次の手順を行います。
   - 受信者に通知するアラートの種類を選択します（たとえば、重大なアラート、警告のアラート、情報のみのアラート、またはこれらの組み合わせ）。
   - **受信者** の下で、通知の宛先とする各受信者（ユーザー自身も含む）の電子メールアドレスを入力します。電子メールアドレスの区切りにカンマ（,）を使用してください。
3. 通知の設定をテストするには、**テスト通知の送信**をクリックし、**OK** をクリックします。

SMTP サーバーの構成

System Center Data Protection Manager（DPM）2007 には、アラート通知と電子メールによるレポートをサブスクライブするオプションがあります。これらのいずれかの機能を有効にする場合は、最初に、電子メールの送信に使用する SMTP（簡易メール転送プロトコル）サーバーを構成する必要があります。次に、どの電子メールサーバーを使用するかを指定します。

セキュリティを強化するには、SMTP サーバーを認証済みとして構成します。SMTP サーバーが認証されると、電子メール通知とレポートの送信時に、DPM はサーバーに指定されたユーザー名とパスワードを要求します。

メモ

DPM は認証済みの SMTP サーバーと認証されていない SMTP サーバーの両方による電子メールの送信をサポートしています。

手順

認証を必要としない SMTP サーバーを使用するように DPM を構成するには、次の手順に従います。

1. DPM 管理者コンソールの **操作** メニューで、**オプション** をクリックします。
2. **オプション**ダイアログボックスの **SMTP サーバー** タブで、DPM が送信する電子メールメッセージの **From** ボックスに表示する SMTP サーバーの名前、SMTP サーバーのポート、および電子メールアドレスを入力します。

   From ボックス内の電子メールアドレスは、SMTP サーバー上の有効な電子メールアドレスである必要があります。
3. SMTP サーバーの設定をテストするには、**テスト用電子メールの送信** をクリックし、テストメッセージの宛先とする電子メールアドレスを入力し、**OK** をクリックします。

認証を必要とする SMTP サーバーを使用するように DPM を構成するには、次の手順に従います。

1. DPM 管理者コンソールの **操作** メニューで、**オプション** をクリックして **オプション** ダイアログボックスを表示します。
2. **SMTP サーバー**タブで、表示する SMTP サーバー名、SMTP サーバーのポート、電子メールアドレスを入力します。
3. **認証済み SMTP サーバー**領域で、該当するボックスにユーザー名とパスワードを入力します。

   メモ

   ユーザー名 は、ドメインユーザー名（たとえば、domain\user name）である必要があります。 **From** アドレスは、ユーザーの SMTP アドレスである必要があります。
4. SMTP サーバーの設定をテストするには、**テスト用電子メールの送信** をクリックし、テストメッセージの宛先とする電子メールアドレスを入力し、**OK** をクリックします。

関連項目

オプションの構成タスク

DPM アラートの発行

Microsoft System Center Data Protection Manager（DPM）2007 サーバーを Microsoft Operations Manager 2005（MOM）または System Center Operations Manager 2007 で集中的に監視することに決めた場合にのみ、**アラートの発行** オプションを使用します。このオプションは、DPM 管理コンソールに表示される DPM アラートを MOM または System Center Operations Manager 2007 の表示と同期するのに使用します。

アラートの発行 オプションにより、ユーザー操作を必要とする可能性のある、既存の実行可能な DPM アラートのすべてが DPM アラートイベントログに対して発行されます。DPM サーバーにインストールされている MOM または Operations Manager 2007 エージェントは、MOM または Operations Manager 2007 に対して、**DPM アラート** イベントログ内にアラートを発行し、新しいアラートが生成されるごとに表示を更新し続けます。

DPM 管理パック、および

DPM サーバーを集中的に監視する方法については、それぞれ以下を参照してください。

- 「DPM 2007 Management Pack Guide for Microsoft Operations Manager 2005」（Microsoft Operations Manager 2005 用の DPM 2007 管理パックのガイド）(http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkID=66735)
- 「DPM 2007 Management Pack Guide for System Center Operations Manager 2007」（System Center Operations Manager 2007 用の DPM 2007 管理パックのガイド）(http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkID=100474)

既存の DPM アラートを発行するには、次の手順に従います。

1. DPM 管理者コンソールの **操作** メニューで、**オプション** をクリックします。
2. **オプション**ダイアログボックスの **アラートの発行** タブで、**アクティブなアラートの発行** をクリックし、**OK** をクリックします。

DPM 管理シェルのインストール

Windows PowerShell をベースとする DPM 管理シェルは、タスクベースのスクリプティングをサポートするインタラクティブコマンドラインテクノロジです。

Microsoft System Center Data Protection Manager（DPM）2007 には、DPM 管理者コンソールに加えて、データ保護の管理タスクに使用できる独自の Windows PowerShell コマンドセットが備わっています。DPM 管理者は、コンソール内で実行できる管理タスクの多くを実行するために、DPM cmdlets を使用できます。

DPM 管理シェルを DPM サーバー以外の複数のコンピュータにインストールして、複数の DPM サーバーをリモートから管理することも可能です。DPM 管理シェルは、Windows XP または Windows Vista を実行しているデスクトップコンピュータにもインストールすることができます。

手順

DPM 管理シェルのインストールは、次の手順で行います。

1. ローカル Administrators グループのメンバーであるドメインユーザーアカウントを使用して、DPM 管理シェルをインストールするコンピュータにログオンします。
2. Microsoft Data Protection Manager 2007 の製品 DVD を DVD ドライブにセットします。DPM のセットアップウィザードが自動的に起動しない場合は、DVD のルートフォルダにある **Setup.exe** をダブルクリックします。

   または

   ネットワーク共有から DPM をインストールする場合は、インストール共有に移動し、共有のルートフォルダにある **Setup.exe** をダブルクリックします。
3. **Microsoft System Center Data Protection Manager 2007**画面で、**DPM 管理シェルのインストール** をクリックします。

DPM システム回復ツールのインストール

DPM システム回復ツール（SRT）は、DPM 2007 サーバーと DPM によって保護されるコンピュータのベアメタル回復を容易にするために DPM に提供されているソフトウェアです。DPM SRT は、DPM 2007 サーバーまたは別のサーバーにインストールします。

DPM SRT のインストール時に、プライマリファイルの保存場所を指定する必要があります。そこには、DPM SRT 復旧ポイントが含まれます。プライマリファイルの保存場所は、オペレーティングシステムと DPM SRT がインストールされているディスクとは別のディスクにすることをお勧めします。それが不可能な場合は、同じディスク上の別のボリュームにしてください。

DPM SRT は DPM 2007 の製品 DVD には収録されていません。DPM システム回復ツール CD から別途にインストールする必要があります。DPM SRT のインストールの詳細については、DPM SRT CD の DPM システム回復ツールのヘルプ（.chm ファイル）内の「インストール」ノードの下にあるトピックを参照してください。

DPM 2007 のインストールに関するトラブルシューティング

本項では、System Center Data Protection Manager (DPM) 2007 と保護エージェントのインストール時に発生する問題のトラブルシューティングについて説明します。

本項の内容

DPM 2007 のインストールに関する問題のトラブルシューティング
保護エージェントのインストールに関する問題のトラブルシューティング

DPM 2007 のインストールに関する問題のトラブルシューティング

次の表では、System Center Data Protection Manager (DPM) 2007 のインストール時に発生する問題のトラブルシューティングについて説明します。

DPM のインストールに関する問題

問題	考えられる原因	解決策
DPM をインストールすると DPM 以外のアプリケーションが中断される。	DPM のインストール中、セットアップは Windows Management Instrumentation（WMI）サービスを再開します。DPM サーバー上で DPM 以外のアプリケーションとその前提条件ソフトウェアを実行している場合、WMI サービスが再開されている間、それらのアプリケーションの操作が中断されることがあります。	中断を避けるには、DPM セットアップを実行する前に他のすべてのアプリケーションをシャットダウンしてください。

問題	考えられる原因	解決策
エラー 812　レポートの構成が失敗した。	この問題は、SQL Server Reporting Services と Windows SharePoint Services の両方が同じインターネットインフォメーションサービス（IIS）アプリケーションツールにインストールされている場合に発生します。	この問題を解決するには、以下のタスクのいずれかを実行します。 • **プログラムの追加と削除** を使用して Windows SharePoint Services をアンインストールし、DPM をアンインストールし、DPM をインストールしなおします。 または • SQL Server Reporting Services と Windows SharePoint Services のサイドバイサイドインストールを構成します。手順については、「Troubleshooting a Side-by-Side Installation of Reporting Services and Windows SharePoint Services」（Reporting Services と Windows SharePoint Services のサイドバイサイドインストールのトラブルシューティング）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=50877）を参照してください。 **メモ** 「Troubleshooting a Side-by-Side Installation of Reporting Services and Windows SharePoint Services」（Reporting Services と Windows SharePoint Services のサイドバイサイドインストールのトラブルシューティング）で言及されている Rsactivate ツールは、DPM のインストールパス Microsoft Data Protection Manager\Prerequisites\MSSQL\Reporting Services\ReportServer\RSReportServer.config にあります。

問題	考えられる原因	解決策
DPM のインストールが失敗する。	IIS のインストールが失敗し、そのために DPM のインストールが失敗する。	**Windows コンポーネントの追加と削除** を使用して IIS をアンインストールし、手動でインストールしなおします。Windows コンポーネントウィザードで IIS ファイルが求められた場合は、Microsoft Windows Server の製品 CD をセットします。 IIS のインストール時には、次の点に注意してください。 • Windows Server 2003 オペレーティングシステムのみをインストールし、後で Service Pack 2（SP2）にアップデートした場合は、Windows Server 2003 CD を使用する必要があります。 • オペレーティングシステムに Windows Server 2003 Service Pack 1（SP1）をスリップストリームし、後で Windows Server 2003 SP2 にアップデートした場合は、Windows Server SP1 のスリップストリーム CD を使用する必要があります。 • オペレーティングシステムに Windows Server 2003 SP2 をスリップストリームした場合は、Windows Server 2003 SP2 のスリップストリーム CD を使用する必要があります。
エラー 810 または ID: 4315 このワークステーションとプライマリドメインの間の信頼関係に問題が発生した。	インストール中に DPM サーバーがドメインコントローラに接続できない場合、DPM のインストールが失敗します。	DPM サーバーがドメインコントローラと通信できることを確認します。また、DNS エントリがドメインコントローラ用であり、正しく構成されていることを確認します。
エラー 820 Windows Server 2008 上で前提条件の確認の実行中に、セットアップがシステム構成を照会できない。	DPM が必要とするコンポーネントをすべて取り付けずに IIS がインストールされた場合に、この問題が発生します。	この問題を解決するには、IIS を削除し、DPM のセットアップを再度実行します。

リモート SQL サーバーの問題

次の表では、リモート SQL サーバーの問題のトラブルシューティングについて説明します。

リモート SQL サーバーの問題

問題	考えられる原因	解決策
エラー 812 レポートの導入が失敗した。	Windows Server 2008 オペレーティングシステム x64 のサーバー上で実行されている SQL サーバーのインスタンスを選択すると、DPM のセットアップが失敗します。	この問題を解決するには、以下の手順を実行します。 1. DPM 2007 をアンインストールします。 2. SQL Server 2005 のリモートインスタンスが実行されている Windows Server 2008 x64 コンピュータで、サポート技術情報 938245「How to install and configure SQL Server 2005 Reporting Services on a computer running Windows Server 2008」（Windows Server 2008 が実行されているコンピュータに SQL Server 2005 Reporting Services をインストールして設定する方法）(http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=102506) の手順に従います。 3. DPM のセットアップを再度実行します。

エラー ID 4307 のトラブルシューティング

次の表では、**エラー ID 4307** のトラブルシューティングについて説明します。このエラーは、System Center Data Protection Manager（DPM）2007 のインストール時にリモートの SQL サーバーデータベースへの接続を試みた際に発生します。

エラー ID 4307 のトラブルシューティング

考えられる原因	解決策
SQL サーバーが実行されているコンピュータへのリモート接続が無効になっている。	SQL サーバーのリモートインスタンスを有効にするには、次の手順を行います。 1. スタート メニューから、**すべてのプログラム**、**Microsoft SQL Server 2005**、**構成ツール** の順にポイントし、**SQL Server 構成マネージャ** をクリックします。 2. SQL Server 構成マネージャのコンソールウィンドウで、**SQL Server 2005 ネットワーク構成** を展開し、DPM の名前付きインスタンスのネットワークプロトコルを選択します。 3. 詳細ウィンドウで、TCP/IP が無効の場合は、**TCP/IP** を右クリックして **有効にする** をクリックします。
SQL Server ブラウザサービスが無効になっている。	SQL Server ブラウザサービスを開始するには、以下の手順を行います。 1. SQL Server 構成マネージャのコンソールウィンドウで、**SQL Server 2005 サービス** をクリックします。 2. 詳細ウィンドウで、**SQL Server ブラウザ** を右クリックし、**プロパティ** をクリックします。 **SQL Server ブラウザのプロパティ** 3. ダイアログボックスの **サービス** タブで、**開始モード** ドロップダウンリストから **自動** を選択し、**OK** をクリックします。 **メモ** 既定では、Microsoft SQL Server 2005 は SQL Server ブラウザサービスが自動的に開始するように設定します。
SQL Server のリモートインスタンスの名前の形式が正しくない。	リモートの SQL Server インスタンス名が次の形式になっていることを確認します。 *<コンピュータ名>\<インスタンス名>* **メモ** <コンピュータ名> は既定のインスタンスにのみ使用してください。

考えられる原因	解決策
DPM サーバーと SQL Server が実行されているコンピュータの間にネットワーク接続がない。	DPM サーバーと SQL Server が実行されているコンピュータの間に接続があることを確認します。

保護エージェントのインストールに関する問題のトラブルシューティング

次の表では、保護エージェントのインストール中に表示される可能性のある特定のエラーメッセージを補足するトラブルシューティングについて説明します。

トラブルシューティングを開始する前に、最初に保護エージェントを手動でインストールしてみることをお勧めします。保護エージェントを手動でインストールする詳細な手順については、「Installing Protection Agents Manually」（保護エージェントの手動によるインストール）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=100443）を参照してください。

エージェントのインストールに関する問題

問題	考えられる原因	解決策
エラー 300: 指定されたサーバーと通信できなかったので、エージェントの操作が失敗した。	• DPM サーバー上のファイアウォール構成が正しくありません。 • リモートプロシージャコール（RPC）が使用できません。	この問題を解決するには、以下の手順を実行します。 • ファイアウォール構成の要件については、『DPM Operations Guide』（DPM の操作ガイド）で「Managing DPM Servers」（DPM サーバーの管理）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=91853）を参照してください。 • RPC サーバーが使用できない場合は、マイクロソフトサポート技術情報 224370「Troubleshooting RPC Server is Unavailable in Windows」（RPC サーバーのトラブルシューティングが Windows で使用できない）（http://go.microsoft.com/fwlink/?linkid=45817）を参照してください。

問題	考えられる原因	解決策
エラー 303: 指定されたサーバーに対するエージェントの操作が失敗した。	• 表示されているサーバーで別のインストールが実行中です。 • サーバー上の起動ボリュームが、ファイルアロケーションテーブル（FAT）としてフォーマットされています。	• インストールが完了するまで待ってから、操作を再試行します。 • 十分な空き容量がある場合は、起動ボリュームを NTFS ファイルシステムに変換します。 FAT ボリュームを NTFS に変換するための **Convert** コマンドの使い方の詳細については、Microsoft TechNet で「Convert」（変換）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId= 50882）を参照してください。 マイクロソフトサポート技術情報 156560「Free Space Required to Convert FAT to NTFS」（FAT から NTFS への変換に必要な空き容量）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId= 50883）を参照してください。 • これらの操作をすべて行っても問題が解決しない場合は、表示されているサーバーを再起動し、操作を再試行してください。
エラー 306: 指定されたサーバーには保護エージェントの別のバージョンがインストール済みであるため、エージェントのインストールが失敗した。	この問題は、保護エージェントがサーバーにインストール済みであるにもかかわらず、DPM データベースに保護エージェントがインストールされた記録がない場合に発生します。	次の手順を行って保護エージェントを再インストールします。 1. ローカルでサーバーから保護エージェントをアンインストールします。 2. DPM サーバー上で、DPM 管理者コンソールの **管理** タスク領域の **エージェント** タブでサーバーを選択します。 **操作** セクションで **情報の更新** をクリックします。 エージェントの状態が **エラー** に変わります。 3. **詳細**セクションで、**サーバーのレコードをこの DPM コンピュータから削除する** をクリックします。 4. 保護エージェントをサーバーに再インストールします。

問題	考えられる原因	解決策
エラー 308: 指定されたサーバー上の DPM 保護エージェントサービスとの通信エラーのために、エージェントの操作が失敗した。	• DPM サーバー上のファイアウォール構成が正しくありません。 • インターネットプロトコルセキュリティ（IPSec）の構成。 • RPC サーバーが使用できません。	• ファイアウォール構成の要件については、『DPM Operations Guide』（DPM の操作ガイド）で「Managing DPM Servers」（DPM サーバーの管理）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=91853）を参照してください。 • 特定のポート上または特定のアドレスに対してなど、特定の IP トラフィックをブロックするように IPSec を構成することが可能です。IPSec のトラブルシューティングについては、「IPsec Troubleshooting」（IPsec のトラブルシューティング）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=50885）を参照してください。 • マイクロソフトサポート技術情報 224370「Troubleshooting RPC Server is Unavailable in Windows」（RPC サーバーのトラブルシューティングが Windows で使用できない）（http://go.microsoft.com/fwlink/?linkid=45817）を参照してください。
エラー 316: 指定されたサーバー上の DPM 保護エージェントサービスが反応しなかったために、エージェントの操作が失敗した。	DPM サーバー上のファイアウォール構成が正しくありません。	ファイアウォール構成の要件については、『DPM Operations Guide』（DPM の操作ガイド）で「Managing DPM Servers」（DPM サーバーの管理）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=91853）を参照してください。
エラー 319: 指定されたサーバー上の DPM エージェントコーディネータサービスとの通信エラーのために、エージェントの操作が失敗した。	DPM サーバー上のファイアウォール構成が正しくありません。	ファイアウォール構成の要件については、『DPM Operations Guide』（DPM の操作ガイド）で「Managing DPM Servers」（DPM サーバーの管理）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=91853）を参照してください。
エラー 324: 指定されたサーバー上の DPM エージェントコーディネータサービスが反応しなかったために、エージェントの操作が失敗した。	DPM サーバー上のファイアウォール構成が正しくありません。	ファイアウォール構成の要件については、『DPM Operations Guide』（DPM の操作ガイド）で「Managing DPM Servers」（DPM サーバーの管理）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=91853）を参照してください。

問題	考えられる原因	解決策
エラー 341: 入力された資格情報には、指定されたサーバーに対する十分な特権がないため、エージェントの操作が失敗した。	• 使用されているアカウントには、サーバーに対する十分な特権がありません。 • DPM サーバー、エージェントをインストールしているサーバー、およびドメインコントローラのシステム時刻が同期されておらず、そのために Kerberos 認証が失敗します。 • DPM サーバー、または保護エージェントのインストールを試みているコンピュータ上の DNS 設定が正しくありません。	• 表示されているサーバーに対する管理者特権を持つアカウントを使用して操作を再試行します。 • DPM サーバーのシステム時刻とエージェントをインストールするサーバーのシステム時刻が、ドメインコントローラのシステム時刻と同期されていることを確認します。 • DNS の設定が正しいことを確認します。
エラー 342: DPM サーバーが指定されたサーバーと通信できなかったため、エージェントの操作が失敗した。	DPM サーバー上のファイアウォール構成が正しくありません。	ファイアウォール構成の要件については、『DPM Operations Guide』（DPM の操作ガイド）で「Managing DPM Servers」（DPM サーバーの管理）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=91853）を参照してください。

問題	考えられる原因	解決策
エラー 348: エージェントが、指定されたサーバー上の DPM エージェントコーディネータサービスとの通信を試みたときに、エラーが発生した。	コンピュータ上の COM オブジェクト用のセキュリティ設定が正しくありません。	サーバー上の COM アクセス許可を確認します。 DCOM の構成が次のように設定されていることを確認します。 **COM セキュリティの既定のアクセス許可** • ローカルアクセスとリモートアクセスが自身に対して許可されている。 • ローカルアクセスがシステムに対して許可されている。 **COM セキュリティコンピュータアクセスの制限（セキュリティ制限）** • ローカルおよびリモートアクセスが NT AUTHORITY\ANONYMOUS LOGON に対して許可されている。 • ローカルおよびリモートアクセスが BUILTIN\Distributed COM Users に対して許可されている。 • ローカルおよびリモートアクセスが \Everyone に対して許可されている。 **COM セキュリティの既定の起動許可** • 起動が NT AUTHORITY\SYSTEM に対して許可されている。 • 起動が NT AUTHORITY\INTERACTIVE に対して許可されている。 • 起動が BUILTIN\Administrators に対して許可されている。 **COM セキュリティコンピュータ起動の制限（セキュリティ制限）** • ローカルの起動および有効化が \Everyone に対して許可されている。 • ローカルおよびリモートの起動、ローカルおよびリモートの有効化が BUILTIN\Administrators に対して許可されている。 ローカルおよびリモートの起動、ローカルおよびリモートの有効化が BUILTIN\Distributed COM Users に対して許可されている。

問題	考えられる原因	解決策
エラー 271: ユーザーが管理者アクセスを持っていない。 または **エラー 377**: DCOM 構成における最小要件が満たされなかったために、エージェントの操作が失敗した。	DCOM の構成設定が最小要件を満たしませんでした。	DCOM が有効であることを確認します。 DCOM が有効な場合は、DCOM の構成が次のように設定されていることを確認します。 **COM セキュリティの既定のアクセス許可** • ローカルアクセスとリモートアクセスが自身に対して許可されている。 • ローカルアクセスがシステムに対して許可されている。 **COM セキュリティコンピュータアクセスの制限（セキュリティ制限）** • ローカルおよびリモートアクセスが NT AUTHORITY\ANONYMOUS LOGON に対して許可されている。 • ローカルおよびリモートアクセスが BUILTIN\Distributed COM Users に対して許可されている。 • ローカルおよびリモートアクセスが \Everyone に対して許可されている。 **COM セキュリティの既定の起動許可** • 起動が NT AUTHORITY\SYSTEM に対して許可されている。 • 起動が NT AUTHORITY\INTERACTIVE に対して許可されている。 • 起動が BUILTIN\Administrators に対して許可されている。 **COM セキュリティコンピュータ起動の制限（セキュリティ制限）** • ローカルの起動および有効化が \Everyone に対して許可されている。 • ローカルおよびリモートの起動、ローカルおよびリモートの有効化が BUILTIN\Administrators に対して許可されている。 • ローカルおよびリモートの起動、ローカルおよびリモートの有効化が BUILTIN\Distributed COM Users に対して許可されている。

問題	考えられる原因	解決策
システムエラー 1130: このコマンドを処理するために必要なサーバーの記憶域がない。 または **イベント ID 2011**: トランザクションを完了するためのメモリが不足している。いずれかのアプリケーションを閉じてから再度実行してください。	サーバーがローカルデバイスを使用するには、サーバーの構成パラメータ "IRPStackSize" が小さすぎます。	このパラメータの値を増やすことをお勧めします。マイクロソフトサポート技術情報 177078「Antivirus software may cause Event ID 2011」（アンチウイルスソフトウェアがイベント ID 2011 の原因となる場合がある）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=73102）を参照してください。
RPC サーバーが使用できません。	リモートコンピュータ上でファイアウォールが有効です。	保護エージェントをインストールするリモートコンピュータ上でファイアウォールが有効な場合は、インストール前に **DPMAgentInstaller**.exe 実行可能ファイルを実行する必要があります。詳細については、「Installing DPM 2007 Behind a Firewall」（ファイアウォールの内側への DPM 2007 のインストール）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=101313）を参照してください。
ローカルグループ DPMRADCOMTrusted-Machines の作成中にエージェントの操作が失敗した。	並列レプリケーションモードの 2 つのドメインコントローラにインストールしようとすると、保護エージェントのインストールは失敗します。	並列レプリケーションモードの複数のドメインコントローラに保護エージェントを同時にインストールすることはできません。ドメインコントローラ間でレプリケーションが行われるのを待ってから、2 番目のドメインコントローラに保護エージェントをインストールします。次の手順に従って、レプリケーションを強制することもできます。 コマンドプロンプトで **repadmin /syncall** と入力します。 **repadmin** は、Windows Server 2003 のサポートツールと共にインストールするユーティリティです。 **メモ** 並列レプリケーションモードの複数のドメインコントローラは、同じ DPM サーバーによって保護する必要があります。

問題	考えられる原因	解決策
The Windows SharePoint Services farm backend server does not appear as protected in DPM Administrator Console.	Windows SharePoint Services ファームを保護するためにバックエンドサーバーに保護エージェントをインストールすると、**エージェント** タブの **管理** タスク領域にサーバーが保護されているものとして表示されません。	何も対処する必要はありません。Windows SharePoint Services ファームがサーバー上のデータを持っている場合、DPM はバックエンドサーバーを内部で保護します。
Windows Server 2003 が実行されているプライマリ以外のドメインコントローラに保護エージェントをインストールしようとすると、失敗する。	Windows Server 2000 でプライマリドメインコントローラ（PDC）が実行されている場合は、必要な分散 COM ユーザーグループが存在しません。	この問題を解決するには、フォレストルート PDC エミュレータの操作マスターロールホルダを Windows Server 2003 にアップグレードしてから、保護エージェントのインストールを再度行ってください。 詳細については、サポート技術情報 827016「Local service and other well-known security principals do not appear on your Windows Server 2003 domain controller」（ローカルサービスその他の既知のセキュリティプリンシパルが Windows Server 2003 ドメインコントローラに表示されない）(http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=101729) を参照してください。

DPM 2007 における DPM 管理者コンソール

本項では、DPM 管理者のレイアウトを示して一般的なタスクのコントロールがどこにあるかを説明するコンソールのツアーを含め、DPM 管理者コンソールの概要を示します。また、DPM 管理者コンソールの 5 つのタスク領域とその関連する動作、および DPM の管理方法について説明します。

メモ

バックアップオペレータなど、管理者グループ以外のグループのメンバーである場合は、DPM 管理者コンソールにアクセスする必要はありません。

DPM 管理者コンソールは DPM の中心的な管理ツールで、統合されたインタフェースを使用して、**監視**、**保護**、**回復**、**レポート**、および **管理** の各タスク領域に素早くアクセスできます。

DPM 管理者コンソールの複数のインスタンスを同時に管理するには、DPM サーバー以外のコンピュータに DPM 管理シェルをインストールしてください。DPM 管理シェルは、Windows XP または Windows Vista を実行しているデスクトップコンピュータにもインストールすることができます。

本項の内容

DPM 管理者コンソールを使用して DPM 2007 を管理する方法

DPM 管理者コンソールの使い方

DPM タスク領域の使い方

DPM 管理者コンソールの使い方

本項では、DPM 管理者コンソールのレイアウトを示し、一般的なタスクのコントロールがある場所について説明します。

タスク領域と表示ウィンドウ

タスク領域とは、DPM 管理者コンソールにあり、グループ化された論理的に関連する機能のセットです。コンソールには、**監視**、**保護**、**回復**、**レポート**、および **管理** という 5 つのタスク領域があります。各タスク領域は、**回復** を除いて、表示ウィンドウ（ラベルなし）、**詳細** ウィンドウ、および **操作** ウィンドウという 3 つのウィンドウで構成されています。

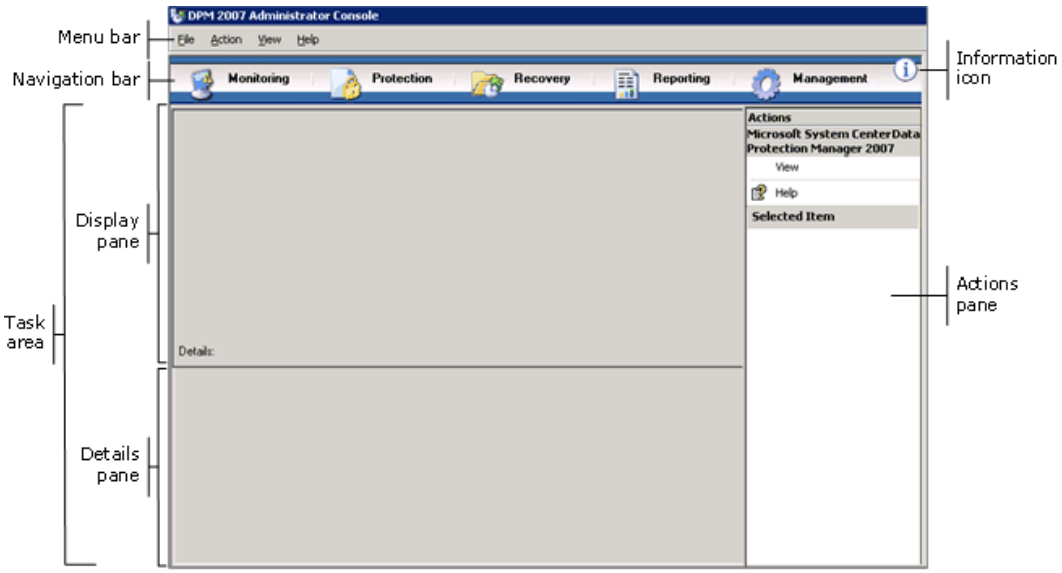
メモ

回復 タスク領域には、参照と検索の機能を持つもう 1 つのウィンドウが加わっています。

各ウィンドウに表示される情報について以下に説明します。

- **表示ウィンドウ**。現在のタスクと関連する項目が表示されます。たとえば、**保護** タスク領域の表示ウィンドウには、保護グループの名前とそれらのグループのメンバーが一覧表示されます。一部のタスク領域の表示ウィンドウは、機能のサブセットをまとめたタブに分割されています。たとえば、**管理** タスク領域の表示ウィンドウは、**エージェント**、**ディスク**、および **ライブラリ** という 3 つのタブに分割されています。
- **詳細ウィンドウ**。表示ウィンドウで選択した項目のプロパティや状態に関する情報などの詳細が表示されます。たとえば、**保護** タスク領域の **詳細** ウィンドウには、選択した保護グループに関する状態、保存期間、およびその他の詳細が表示されます。
- **操作 ウィンドウ**。現在のタスクと、（場合により）表示ウィンドウで選択されている項目に関連する機能にアクセスできます。たとえば、**保護** タスク領域の **操作** ウィンドウには、保護グループを作成するコマンドがあります。表示ウィンドウ内で特定の保護グループが選択されていると、**操作** ウィンドウにもメンバーをグループに追加するためのコマンドが表示されます。

DPM 管理者コンソールのレイアウト



ナビゲーションバー

ナビゲーションバーを使用して、コンソールの 5 つのタスク領域の間を移動することができます。タスク領域を選択するには、領域の名前をクリックします。

メニューバー

メニューバーには、**ファイル**、**操作**、**表示**、および **ヘルプ** という 4 つのメニューがあります。

- **ファイルメニュー**。標準の Microsoft 管理コンソール（MMC）コマンドがあります。MMC については、MMC ヘルプを参照してください。
- **操作メニュー**。 **操作** ウィンドウに表示されているのと同じコマンド、および **オプション** コマンドと **ヘルプ** コマンドがあります。 **オプション** コマンドを使用して、エンドユーザー回復の構成、自動検出のスケジュール設定、および通知のサブスクライブなど、システム全体のオプションを設定することができます。 **ヘルプ** コマンドを使用して、DPM ヘルプと MMC ヘルプの両方にアクセスできます。
- **表示メニュー**。コンソールのタスク領域を移動するための別の方法、**操作** ウィンドウを隠すコマンド、DPM コミュニティ Web サイトへのリンクが表示されます。
- **ヘルプメニュー**。DPM ヘルプと MMC ヘルプの両方にアクセスできます。このメニューから DPM ヘルプにアクセスするには、**ヘルプトピック** をクリックし、**Data Protection Manager ヘルプ** をクリックします。 **ヘルプ** メニューには、MMC のバージョン情報、および Microsoft System Center Data Protection Manager 2007 の簡略バージョン情報も表示されます。

情報アイコン

情報アイコンを使用して、DPM の完全版およびプロダクト ID 情報にアクセスできるほか、マイクロソフトソフトウェアライセンス条項へのリンクにもアクセスできます。

関連項目

DPM 2007 における DPM 管理者コンソール

DPM タスク領域の使い方

DPM 管理者コンソールには、**監視**、**保護**、**回復**、**レポート**、および **管理** という 5 つのタスク領域があります。 **操作** ウィンドウを使用して、現在のタスクと、（場合により）表示ウィンドウで選択されている項目に関連する機能にアクセスできます。

次の表では、各タスク領域で行える操作の詳細について説明します。

タスク領域	操作
監視	**監視** タスク領域を使用して、データ保護、データ回復、およびその他の DPM 操作の状態を監視します。 **監視タスク** 領域には、次のタブがあります。 • **アラート** — エラー、警告、情報メッセージが表示されます。保護グループ、コンピュータ、または重要度によってアラートをグループ化できます。また、アクティブなアラートのみを表示したり、アクティブなアラートとアクティブでないアラートの履歴の両方を表示することも可能です。また、通知にサブスクライブして、アラートを電子メールで受け取ることもできます。 • **ジョブ** — ジョブの状態とその関連するタスクが表示されます。保護グループ、コンピュータ、状態、または種類によってジョブをグループ化できます。また、期間によってジョブにフィルタをかけることも可能です。また、定期的にスケジュールされた同期操作をジョブの一覧に含めるかどうかを選択できます。
保護	**保護** タスク領域を使用して次のタスクを行います。 • 保護グループのメンバーの作成、名前の変更、管理。 • 保護のスケジュール、ディスクの割り当て、およびその他のオプションの管理。 • 同期と整合性チェックのジョブの手動による実行。 • 復旧ポイントの管理。 • 自動検出の結果の表示と結果への対応。
回復	**回復** タスク領域を使用して、復旧ポイントからデータを検索し、回復します。 **回復** タスク領域には、次のタブがあります。 • **参照** — 保護されるコンピュータによって使用できる復旧ポイントを参照できます。 • **検索** — データの種類、位置、出所、および復旧ポイントの日付に基づいて、使用可能な復旧ポイントを検索できます。
レポート	**レポート** タスク領域を使用して次のタスクを行います。 • DPM の操作に関するレポートの生成と表示。 • 自動レポート生成のスケジュール化。 • レポートサービスの設定の管理。

タスク領域	操作
管理	**管理** タスク領域を使用して、保護エージェント、記憶域プール用のディスク、およびテープライブラリを管理します。 **管理** タスク領域には、次のタブがあります。 • **エージェント** — コンピュータに導入されている保護エージェントの一覧が表示され、エージェントとエージェントライセンスのインストール、アンインストール、およびアップデートができます。 • **ディスク** — 記憶域プールに含まれているディスクの一覧が表示され、プールへのディスクの追加と削除ができます。 • **ライブラリ** — DPM サーバーに取り付けられているテープライブラリが表示され、ライブラリ内のテープを管理できます。

関連項目

DPM 2007 における DPM 管理者コンソール

DPM 管理者コンソールを使用して DPM 2007 を管理する方法

DPM 管理者コンソールを使用するには、管理者特権のあるドメインアカウントを使用して DPM サーバーにログオンしておく必要があります。

メモ

また、DPM 管理者コンソールをカスタムの Microsoft Management Console（MMC）に対するスナップインとして追加することもできます。DPM 管理者コンソールは、MMC のスナップインの追加と削除メニューに **Microsoft System Center Data Protection Manager 2007** として表示されています。

DPM 管理者コンソールは DPM サーバー上でローカルに実行されますが、リモートデスクトップ接続を使用してコンソールにリモートからアクセスすることも可能です。

手順

DPM サーバー上で DPM 管理者コンソールを実行するには、次の手順に従います。

- **スタート** メニューで、**すべてのプログラム**、**Microsoft System Center Data Protection Manager 2007** の順にポイントし、**Microsoft System Center Data Protection Manager 2007** をクリックします。

  または

  デスクトップで **Microsoft System Center Data Protection Manager 2007** のアイコンをダブルクリックします。

DPM 管理者コンソールにリモートからアクセスするには、次の手順に従います。

1. **スタート**メニューで、**すべてのプログラム**、**アクセサリ**、**通信** の順にポイントしてから、**リモートデスクトップ接続** をクリックします。
2. **リモートデスクトップ接続**ダイアログボックスで、**コンピュータ** ボックスに DPM サーバーの名前を入力し、**接続** をクリックします。
3. **Windows へログオン**ダイアログボックスで、管理者特権を持つドメインユーザーアカウントのログイン情報を入力します。
4. **スタート**メニューで、**すべてのプログラム**、**Microsoft System Center Data Protection Manager 2007** の順にポイントし、**Microsoft System Center Data Protection Manager 2007** をクリックします。

   または

   デスクトップで **Microsoft System Center Data Protection Manager 2007** のアイコンをダブルクリックします。

関連項目

DPM 2007 における DPM 管理者コンソール

導入のベストプラクティス

本項では、System Center Data Protection Manager（DPM）2007 の導入に関するベストプラクティスについて説明します。

DPM 2007 のシステム要件

- System Center Data Protection Manager (DPM) 2007 をインストールする前に、保護される DPM サーバーとコンピュータ、およびアプリケーションがネットワークとセキュリティの要件を満たしていることを確認する必要があります。また、サポートされているオペレーティングシステム上で実行されていること、およびハードウェアとソフトウェアの最小要件を満たしていることも確認してください。

  DPM 2007 のシステム要件の詳細については、「DPM 2007 System Requirements」（DPM 2007 のシステム要件）(http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=66731) を参照してください。

ネットワーク要件

- 広域ネットワーク（WAN）経由でデータを保護する場合は、ネットワーク帯域幅の最小要件として、512 Kbps の速度が必要です。

ハードウェア要件

- DPM は 64 ビットコンピュータにインストールすることをお勧めします。
- DPM は、オペレーティングシステムがインストールされているのと同じボリュームにインストールできます。または、オペレーティングシステムがインストールされていない別のボリュームにインストールすることも可能です。ただし、記憶域プール専用のディスクにインストールすることはできません。記憶域プールとは、保護されるデータのレプリカや復旧ポイントをDPM サーバーが保存するのに使用するディスクセットのことです。
- 保存したい重要なデータがある場合は、DPM によって管理される記憶域プールではなく、記憶域ネットワーク上の高パフォーマンス論理ユニット番号（LUN）を使用できます。

ソフトウェア要件

- DPM は、ドメインコントローラとアプリケーションサーバーのどちらとしても使用できない、唯一の目的に使用する専用のサーバー上で実行するように設計されています。
- 複数の DPM サーバーをリモートで管理するには、DPM サーバー以外のコンピュータに DPM 管理シェルをインストールします。

DPM 2007 のインストール

- DPM 2007 のインストールをサポートするには、Microsoft Windows Server 2003 を正しく設定する必要があります。Windows Server 2003 のインストールの詳細については、「How to Install Windows Server 2003」（Windows Server 2003 のインストール方法）(http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkID=100243) を参照してください。
- DPM 2007 では、DPM のクリーンインストールを行う必要があります。DPM 2007 をインストールする前に、DPM の旧バージョンに加えて、System Center Data Protection Manager 2006（DPM 2006）および関連する前提条件ソフトウェアをアンインストールする必要があります。DPM 2006 と DPM 2007 ではアーキテクチャが異なるため、DPM 2006 が実行されているコンピュータを DPM 2007 に直接アップグレードすることはできません。ただし、DPM 2007 には DPM 2006 の保護グループ構成を DPM 2007 に移行することの可能なアップグレードツールが用意されています。

  DPM 2006 から DPM 2007 へのアップグレードの詳細については、「Upgrading DPM 2006 to DPM 2007」（DPM 2006 から DPM 2007 へのアップグレード）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=66737）を参照してください。
- 共有フォルダから DPM または前提条件ソフトウェア製品をインストールする場合、インストール中、共有フォルダの UNC（Universal Naming Convention）パスが Internet Explorer のローカルイントラネットセキュリティゾーンに追加されます。
- DPM 2007 を Microsoft Exchange Server が実行されているのと同じコンピュータにインストールすることはできません。
- DPM はローカルドライブにのみインストールできます。また、読み取り専用フォルダ、隠しフォルダにインストールすることも、Documents and Settings や Program Files など、ローカルの Windows フォルダに直接インストールすることもできません （ただし、DPM を Program Files フォルダのサブフォルダにインストールすることは可能です）。
- インストールが完了したら、使用可能なすべての Windows Server 2003 サービスパックと更新を適用します。Windows アップデートはすべて、「Windows Update」（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkID=451）から入手できます。

SQL サーバーのリモートインスタンスの使用

- Microsoft SQL Server のリモートインスタンスにクリーンインストールを行うか、または、DPM のために SQL サーバーの専用インスタンスをインストールする場合には、次の設定を使用することをお勧めします。
  - 失敗の監査の既定の設定。
  - 既定の Windows 認証モード。
  - **sa** アカウントに強力なパスワードを設定する。
  - パスワードポリシーのチェックを有効にする。
  - SQL サーバーデータベースエンジンとレポートサービスのコンポーネントのみをインストールする。
  - 特権の最も低いユーザーアカウントを使用して SQL サーバーを実行する。

- リモート SQL サーバーに SQL Server Reporting Services がインストールされている場合、DPM セットアップはその Reporting Service を使用します。SQL サーバーを実行しているリモートコンピュータに SQL Server Reporting Services がインストールされていない場合は、DPM セットアップを続行する前に、SQL サーバーを実行しているリモートコンピュータにサービスをインストールし、設定する必要があります。

DPM サーバーのソフトウェア要件

- DPM をインストールする前に、以下をインストールする必要があります。
  - サポート技術情報（KB）940349「Availability of a Volume Shadow Copy Service (VSS) update rollup package for Windows Server 2003 to resolve some VSS snapshot issues」（VSS スナップショットの一部の問題を解決するための Windows Server 2003 用ボリュームシャドウコピーサービス（VSS）更新ロールアップパッケージの可用性）(http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=99034)
  - サポート技術情報（KB）940349 をインストールし、DPM サーバーまたは保護されるサーバー、もしくはその両方を再起動したら、DPM 管理コンソール内の保護エージェントをリフレッシュすることをお勧めします。

    エージェントをリフレッシュするには、**管理** タスク領域で **エージェント** タブをクリックし、コンピュータを選択し、**操作** ウィンドウで **情報の更新** をクリックします。保護エージェントを更新しないと、エラー ID: 31008 が表示される場合があります。DPM による保護エージェントのリフレッシュは 30 分おきにしか行われないからです。
  - Windows PowerShell 1.0（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=87007 から）。
  - Windows Server 2008 オペレーティングシステム（プレリリースバージョン）には、単一インスタンス記憶域（SIS）。

    Windows Server 2008 への SIS のインストールの詳細については、「Manually Install Required Windows Components」（必要な Windows コンポーネントの手動によるインストール）(http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=10063) を参照してください。
  - ご使用の DPM データベースには、SQL サーバーの既存のリモートインスタンスを使用できます。SQL サーバーのリモートインスタンスを使用する場合は、**sqlprep.msi** をインストールする必要があります。

SQL サーバーのリモートインスタンスの使い方

- リモートコンピュータ上で SQL サーバーのインスタンスを使用するには、**sqlprep.msi** を実行します。これは、DPM の製品 DVD の **DPM2007\msi\SQLprep** フォルダにあります。
- SQL Server サービスと SQL Server Agent サービスの実行に使用するユーザーアカウントが、SQL Server のインストール場所に対する読み取りと実行の権限を持つことを確認してください。
- SQL サーバーのリモートインスタンスを、ドメインコントローラとして実行されているコンピュータ上に置くことはできません。

保護されるコンピュータの要件

- DPM 2007 によって保護される各コンピュータは、保護されるコンピュータのソフトウェア要件を満たしている必要があります。

  保護されるコンピュータのすべての要件については、「Protected Computer Requirements」（保護されるコンピュータの要件）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=100473）を参照してください。

- 保護されるボリュームは、NTFS ファイルシステムとしてフォーマットする必要があります。DPM は、FAT または FAT32 としてフォーマットされているボリュームを保護できません。

  システムパーティションに障害が発生した場合の回復を容易にするには、DPM をシステムパーティションとは別のパーティションにインストールします。また、DPM で保護するには、ボリュームのサイズは 1 GB 以上である必要があります。DPM はボリュームシャドウコピーサービス（VSS）を使用して、保護されるデータのスナップショットを作成します。また、VSS はボリュームのサイズが 1 GB 以上である場合に限りスナップショットを作成します。

- 保護されるコンピュータに保護エージェントをインストールする前に、修正プログラム 940349 を適用する必要があります。詳細については、サポート技術情報（KB）940349「Availability of a Volume Shadow Copy Service (VSS) update rollup package for Windows Server 2003 to resolve some VSS snapshot issues」（VSS スナップショットの一部の問題を解決するための Windows Server 2003 用ボリュームシャドウコピーサービス（VSS）更新ロールアップパッケージの可用性）(http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=99034) を参照してください。

  サポート技術情報（KB）940349 をインストールし、DPM サーバーまたは保護されるサーバー、もしくはその両方を再起動したら、DPM 管理コンソール内の保護エージェントをリフレッシュすることをお勧めします。

  エージェントをリフレッシュするには、**管理** タスク領域で **エージェント** タブをクリックし、コンピュータを選択し、**操作** ウィンドウで **情報の更新** をクリックします。保護エージェントを更新しないと、エラー ID: 31008 が表示される場合があります。DPM による保護エージェントのリフレッシュは 30 分おきにしか行われないからです。

SQL Server 2005 Service Pack 1（SP1）が実行されているコンピュータの保護

- SQL サーバーのデータの保護を開始する前に、SQL Server 2005 SP1 が実行されているコンピュータ上で SQL Server VSS Writer Service を開始する必要があります。

  SQL Server VSS Writer Service は、SQL Server 2005 が実行されているコンピュータ上では、既定でオンになっています。SQL Server VSS Writer Service を開始するには、**サービス** コンソールで **SQL Server VSS writer** を右クリックし、**開始** をクリックします。

Exchange Server 2007 が実行されているコンピュータの保護

- クラスタ連続レプリケーション（CCR）構成の Exchange Server 2007 データを保護するには、事前に修正プログラム 940006 をインストールする必要があります。詳細については、サポート技術情報 940006「Description of Update Rollup 4 for Exchange 2007」（Update Rollup 4 for Exchange 2007 の説明）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=99291）を参照してください。
- 最新エディションの Exchange Server にインストールされている eseutil.exe と ese.dll のバージョンは、DPM サーバーにインストールされているものと同じバージョンである必要があります。また、アップグレードまたはアップデートを適用した後で、Exchange Server が実行されているコンピュータ上で eseutil.exe と ese.dll をアップデートした場合、DPM サーバー上のこれらのファイルをアップデートする必要があります。eseutil.exe および ese.dll の更新の詳細については、『Protected Computer Requirements』（保護されるコンピュータの要件）(http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=100473) で「Eseutil.exe and Ese.dll」（Eseutil.exe と Ese.dll）を参照してください。「Protected Computer Requirements」

仮想サーバーが実行されているコンピュータの保護

- オンラインバックアップ用の仮想コンピュータを保護するには、バージョン 13.715 of Virtual Machine Additions（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=84271）をインストールすることをお勧めします。

Windows SharePoint Services が実行されているコンピュータの保護

- Windows SharePoint Services（WSS）のデータを保護するには、事前に次の処理を行う必要があります。
  - サポート技術情報 941422「Update for Windows SharePoint Services 3.0」（Windows SharePoint Services 3.0 のアップデート）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=100392）のインストール。
  - WSS サーバーで WSS Writer サービスを開始し、次に保護エージェントに WSS ファームの資格情報を提供します。
  - SQL Server 2005 のインスタンスの SQL Server 2005 SP2 へのアップデート。

DPM 2007 の修復

- ほとんどの場合、DPM を再インストールするために DPM 前提条件ソフトウェアをアンインストールする必要はありません。ただし、Microsoft SQL Server 2005 バイナリが破損した場合は、SQL Server 2005 もアンインストールと再インストールが必要になる可能性があります。
- DPM を再インストールするために、保護されるコンピュータから保護エージェントをアンインストールする必要はありません。
- DPM 2007 の再インストールを開始する前に、テープまたはその他のリムーバブル記憶域メディアに DPM データベース、レポートデータベース、およびレプリカのアーカイブを取っておくことを強くお勧めします。手順については、『DPM Operations Guide』（DPM の操作ガイド）で「Disaster Recovery」（障害回復）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=91860）を参照してください。

DPM 2007 のアンインストール

- DPM のアンインストール後も既存のデータ保護構成を保持する予定の場合は、DPM サーバー上でエンドユーザー回復を無効にした後、アンインストールを開始する前に、保護グループ内の各データソースについて同期ジョブを実行します。これらの手順を行えば、サーバー上のファイルへのアクセスが認められていないユーザーが DPM サーバー上のファイルのレプリカにアクセスすることを防止できます。
- DPM のシステム要件をアンインストールした後で、アンインストールを完了するためにコンピュータの再起動が必要です。

DPM 2007 の構成

- System Center Data Protection Manager (DPM) 2007 を使用してデータの保護を開始する前に、DPM によって保護される各コンピュータが保護されるコンピュータのソフトウェア要件を満たしていることを確認する必要があります。

  DPM 2007 のソフトウェア要件については、「Software Requirements」（ソフトウェア要件）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=100242）を参照してください。
- DPM 2007 を使用してデータを保護するには、次の構成タスクをすべて行う必要があります。
  - 記憶域プールに 1 台または複数のディスクを追加します。DPM では USB/1394 ディスクはサポートされていません。
  - カスタムボリュームを使用してデータソースを保護する場合、または、テープベース（D2T）の保護のみを使用する場合は、記憶域プールへのディスクの追加は必須ではありません。
  - DPM は、記憶域プールに追加されたディスク上の既存ボリューム内の領域を使用することができません。記憶域プールのディスク上の既存ボリュームに空き領域があっても、DPM が使用できる領域は、DPM によって作成されるボリューム内の領域に限られます。ディスク領域全体を記憶域プールで使用できるようにするには、ディスク上の既存ボリュームをすべて削除した上で、ディスクを記憶域プールに追加してください。
  - テープでデータを保護する場合は、テープライブラリとスタンドアロンテープドライブを構成します。
  - 保護する各コンピュータに保護エージェントをインストールします。
  - Windows SharePoint Services VSS Writer サービス（WSS Writer サービス）を開始して構成し、保護エージェントにファーム管理の資格情報を提供します。
  - Windows SharePoint Services 3.0 または Microsoft Office SharePoint Server 2007 が実行されているサーバー上でサーバーファームを保護する場合にのみ、このタスクを実行してください。
  - 1 つまたは複数の保護グループを作成します。

テープライブラリの構成

- ハードウェアを変更した場合は、**ライブラリ** タブで **再スキャン** 操作を実行して、新しいテープライブラリとスタンドアロンのテープドライブのすべてについて、状態を確認し、表示を更新します。

  DPM 管理者コンソールの**ライブラリ** タブに一覧表示されているスタンドアロンのテープドライブが、スタンドアロンのテープドライブの物理状態と一致しない場合は、『DPM 2007 Operations Guide』（DPM 2007 の操作ガイド）で「Managing Tape Libraries」（テープライブラリの管理）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=91964）を参照してください。たとえば、テープライブラリからのドライブがスタンドアロンのテープドライブとして表示されていたり、スタンドアロンのテープドライブがテープライブラリ内のドライブとして間違って表示されている場合は、テープドライブの情報を再マップする必要があります。

保護エージェントのインストールと構成

- DPM は、フォレスト内のドメインを越えたコンピュータの保護をサポートしています。ただし、ドメイン間に双方向の信頼を確立する必要があります。ドメイン間に双方向の信頼が確立されていない場合は、各ドメインに個別の DPM サーバーが必要です。DPM 2007 はフォレストを越えた保護をサポートしていません。

  DPM サーバー上でファイアウォールが有効な場合は、DPM サーバー上でファイアウォールを構成する必要があります。DPM サーバー上でファイアウォールを構成するには、TCP トラフィックに対してポート 135 を開き、ファイアウォール経由で通信できるように DPM サービス（Msdpm.exe）と保護エージェント（Dpmra.exe）を有効にする必要があります。

DPM サーバー上でのWindows ファイアウォールの構成

- DPM のインストール時に DPM サーバー上で Windows ファイアウォールが有効な場合は、DPM セットアップによってファイアウォールが自動的に構成されます。

  エージェントコーディネータとの通信を有効にするにはポート 5718 を、保護エージェントとの通信を有効にするにはポート 5719 を開く必要があります。

保護エージェントのインストール

- 保護されるコンピュータに保護エージェントをインストールする前に、修正プログラム 940349 を適用する必要があります。この修正プログラムの詳細については、サポート技術情報（KB）940349「Availability of a Volume Shadow Copy Service (VSS) update rollup package for Windows Server 2003 to resolve some VSS snapshot issues」（VSS スナップショットの一部の問題を解決するための Windows Server 2003 用ボリュームシャドウコピーサービス（VSS）更新ロールアップパッケージの可用性）(http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=99034) を参照してください。

サポート技術情報（KB）940349 をインストールし、DPM サーバーまたは保護されるサーバー、もしくはその両方を再起動したら、DPM 管理コンソール内の保護エージェントをリフレッシュすることをお勧めします。エージェントをリフレッシュするには、**管理** タスク領域で **エージェント** タブをクリックし、コンピュータを選択し、**操作** ウィンドウで **情報の更新** をクリックします。保護エージェントを更新しないと、エラー ID: 31008 が表示される場合があります。DPM による保護エージェントのリフレッシュは 30 分おきにしか行われないからです。

- 保護エージェントのインストール中に、ドメインポリシーが原因でネットワーク関連または権限関連の問題が発生する場合は、保護エージェントを手動でインストールすることをお勧めします。保護エージェントを手動でインストールする手順については、「Installing Protection Agents Manually」（保護エージェントの手動によるインストール）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=100443）を参照してください。

クラスタデータ

- クラスタデータを保護するには、サーバークラスタのすべてのノードに保護エージェントをインストールする必要があります。データの保護を開始する前に、サーバーを再起動する必要があります。保護エージェントの正常なインストールを確実にするために、この再起動が必要です。サービスの開始に要する時間のために、再起動が完了してから DPM がサーバーに接続できる状態になるまでに数分かかる場合があります。

  Microsoft Cluster Server（MSCS）に属するサーバーは DPM によって再起動されません。MSCS クラスタ内のサーバーは、手動で再起動する必要があります。

WSS Writer サービスの開始と構成

- Windows SharePoint Services 3.0 または Microsoft Office SharePoint Server 2007 を実行しているサーバーでサーバーファームの保護を開始する前に、Windows SharePoint Services VSS Writer サービス（WSS Writer サービス）の開始と構成を行う必要があります。

  Windows SharePoint Services ファームに複数の Web Front End（WFE）サーバーがある場合は、新しい保護グループの作成ウィザードで保護を構成する際に WFE サーバーを 1 台だけ選択してください。

  Windows SharePoint Services ファームの管理者パスワードを変更するたびに、**ConfigureSharepoint.exe** を再実行する必要があります。

保護グループの作成

- DPM 管理者コンソールを使用するには、DPM サーバーに対する管理者特権のあるアカウントを使用して、その DPM サーバーにログオンする必要があります。

  データの保護を開始する前に、保護グループを少なくとも 1 つは作成する必要があります。保護グループのガイドラインについては、『Planning a DPM 2007 Deployment』（DPM 2007 の導入計画）で「Planning Protection Groups」（保護グループの計画）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=91849）を参照してください。

長期保護

- スタンドアロンのテープドライブでは、1 つの保護グループに対して、DPM はテープのスペースが足りなくなるまで毎日のバックアップに同じテープを使用します。複数の保護グループに対応するには、別々のテープが必要です。したがって、バックアップにスタンドアロンのテープドライブを使用する場合は、作成する保護グループの数を最小限に留めることをお勧めします。

レプリカの作成

- 低速 WAN 接続を経由して初めて大量のデータを同期する場合は、レプリカを手動で作成することをお勧めします。レプリカの手動作成の詳細については、『DPM 2007 Operations Guide』（DPM 2007 の操作ガイド）で、「Managing Performance」（パフォーマンスの管理）の「Creating Replicas Manually」（手動によるレプリカの作成）（http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=91859）を参照してください。

  手動によるレプリカの作成を選択する場合は、ソース（保護されるサーバー）とレプリカパス（DPM サーバー）の詳細を知っておく必要があります。保護するデータについて、タイムスタンプやセキュリティのアクセス許可など、同じディレクトリ構造とプロパティを保持することが重要です。

アラート通知のサブスクライブ

- 重大なアラート、警告、または情報のみのアラート、およびインスタンス化された回復のステータスを電子メールで通知するように System Center Data Protection Manager（DPM）2007 を構成することができます。

  通知をサブスクライブする前に、DPM が通知の送信に使用する SMTP（簡易メール転送プロトコル）サーバーを構成する必要があります。手順については、「SMTP サーバーの構成」を参照してください。

他のバックアップアプリケーションとの共存

DPM を他のバックアップアプリケーションと共存させる場合（たとえば、DPM は評価中で、既存のソリューションを使用してバックアップを続けたい場合）は、次のガイドラインに従うことをお勧めします。

他のバックアップアプリケーションが完全バックアップのみを実行する場合に限り、DPM 2007 は他の SQL サーバーのバックアップアプリケーションと共存することができます。SQL サーバーデータベース上でログのバックアップを行うために、複数のアプリケーションを同時に使用することはできません。したがって管理者は、他のバックアップアプリケーションでは必ず完全バックアップのみを行うようにしてください。完全バックアップを行ってもログチェーンには何ら影響が及ばないため、DPM によるバックアップは問題なく続行できます。

すべての著作権は Dell および マイクロソフトにあります。日本語翻訳版 © Dell Inc. 2007 - 原文の英語版 © 2007 Microsoft Corporation. この翻訳は Dell Inc. が行い、ユーザーの便宜を図るために個人的利用を目的に提供されています。翻訳はマイクロソフトの校閲を受けておらず、正確性は保証されていません。本書の英語版を参照される場合は、http://technet.microsoft.com/en-us/library/bb795539.aspx にアクセスしてください。マイクロソフトおよびその各供給者は、本書に記載されている情報について、適切性または正確性を一切表明するものではありません。